

Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア

世界を解く  
**【決める】**

《対談》  
 日本のリーダーが語る  
 世界競争力のある人材とは？  
 名古屋市長

**河村たかし氏**  
 一橋大学副学長 山内進  
 進化する大学

進化する大学

**2009一橋大学  
 オープンキャンパス**

一橋大学機関リポジトリ  
 「HERMES-1R」は、  
 多くの可能性を秘めています

4年目を迎える

『男女共同参画時代の  
 キャリアデザイン』

《対談》

一橋の女性たち  
 アビーム&Aコンサルティング株式会社  
 代表取締役社長

**岡俊子氏**

商学研究科准教授 山下裕子

個性は主張する

囲碁棋士六段

**平本弥星氏**  
 (日本棋院東京本院所属)

《特集》

地球の風 地域の風

財団法人極真奨学会国際空手道連盟  
 極真会館浜井派代表

**浜井識安氏**

連載企画

Captains

**三浦新七**

# CONTENTS

## 巻頭特集 1 日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

●対談

名古屋市市長／河村たかし氏 VS 山内 進副学長

値下げをすれば売上げが伸びる。  
商売も政治も大学も基本は同じです

## 進化する大学

### 特集 8 2009 一橋大学オープンキャンパス

Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア～の実像に接した訪問者たち

10 オープンキャンパスでの各学部の取り組み

12 一橋大学機関リポジトリ「HERMES-IR」は、  
多くの可能性を秘めています

16 4年目を迎える『男女共同参画時代のキャリアデザイン』

18 研究室訪問 chat in the den

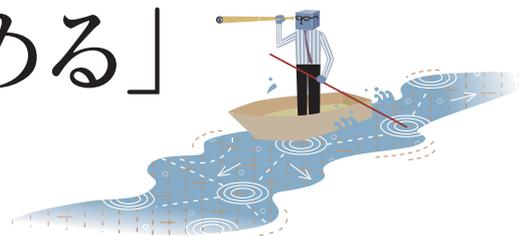
### 連載企画 22 世界を解く——第16回テーマ

24 ●ファイナンス

26 ●スポーツ社会学

28 ●経済学

# 「決める」



### 連載企画 30 Captains

## 三浦新七

稀有な人格・乞われた見識  
応え続けた人生70年

### 連載企画 36 対談 一橋の女性たち

アビームM&Aコンサルティング株式会社 代表取締役社長／岡 俊子氏  
商学研究科准教授／山下裕子

### 連載企画 39 個性は主張する One and Only One

囲碁棋士六段(日本棋院東京本院所属)／平本弥星氏

#### Love of Culture

45 文化の匂い——『ミシシッピー・マサラ』の彼方へ

46 「国際試合という名の異文化体験」

47

### 特集 48 地球の風 地域の風

財団法人極真奨学会国際空手道連盟極真会館浜井派代表／浜井識安氏

#### Campus Information

54 ●一橋大学基金ご寄付者のご芳名

56 ●平成21年度 一橋大学附属図書館 企画展示および講演会のお知らせ

57 ●法科大学院が、平成21年司法試験合格率で2年連続3回目の全国トップになりました

58 ●第4回 一橋大学関西アカデミア開催のお知らせ

## 日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

今回のゲストは名古屋市長の河村たかし氏。衆議院議員として国会でもテレビでも名古屋ことば丸出しで庶民型政治を主張し、みずから「総理を狙う男」と公言していた河村氏が名古屋市長に転身して、はたしてどんな政治を実現しようとしているのか。大学時代のクラスメイトである山内進副学長が、発想の原点にまで踏み込んできた。その応答からは、政治のあるべき姿にとどまらず、人の生き方や大学のあり方にまで及ぶ多くのことを読み取ることができるはずだ。





値下げをすれば売上げが伸びる。  
商売も政治も大学も基本は同じです

名古屋市長

# 河村たかし氏

一橋大学副学長



# 山内 進

河村たかし氏の名古屋市長としての2大公約は、  
市民税の10%減税と、地域委員会による都市内分権。  
「わしが本家だ」という自転車街宣でも  
「議員も市長も役人もパブリックサーバントだ。それを政治の原点にせにゃいかん」  
「税金を払うほうはどえりゃあ苦労しとる。  
税金で食っとるほうが極楽という現状は糾さにゃいかん」  
「楽市楽座をつくって庶民を元気にした織田信長のような庶民革命をやりたい」と訴え、  
名古屋市民の圧倒的な支持を集めた。その発想と情熱はいかにして生まれたか。  
自己分析は大学時代の思い出話から始まった。



## 教え方に文句をつけて 先生にどえりゃあ怒られた

**山内** ぼくらは、たまたま大学の同期生で……

**河村** たしかクラスも一緒だった。1年の時のロシア語クラス。

**山内** そう、K組でした。ということで、今日は君呼びでいきますが、河村君がロシア語を選んだのはどうしてなの。ぼくの場合は、ちょっとかっこつけていえば、ドストイエフスキーを原書で読んでみたいなんてことを思ってなんだけれど。

**河村** 40年以上も前の出来事ですからねえ、ようは覚えていませんが、単純に、「変わったことをやったれ」という。それに、あの頃はベトナム戦争があったりして、左がかったトレンドも

あった。なんとなく社会主義がええというような。ハッハッ。その後はぜんぜんちがう方向に進みましたが、当時は学生運動なんかに首をつっこんだりもしました。わけもわからんと。

**山内** わがクラスにもクラス闘争委員会があった。

**河村** ああ、そうでした。懐かしいなあ。けど、私は1年の頃は硬式野球部に入っておりまして、授業にはあんまり出とらんですよ。

**山内** それでも河村君は、授業で先生に注文をつけたことがある。ロシア語の授業でも英語の授業でも。覚えてる？

**河村** なんか言って、どえりゃあ怒られた記憶はありますが。

**山内** こんな教え方ではダメだと。話せるようにならないことはもちろん、プラクティカルな役には立たない。これでは高校時代と同じじゃないかって文句を言ったんですよ。



**河村** ほう。言われてみれば、思い当たる節がないでもない。

**山内** ぼくは個人的にはどっちの授業もそう嫌いじゃなくて、大学の先生はやっぱりちがう、深みがあるなと感じていた。それもあって、その時の先生と河村君のやりとりは今も記憶に残っている。でも、その河村君が政治的なことに関心をもっていたという印象はまったくない。そうでもなかったの。

## 家の跡は継がんなんものだと 思い込んでいた

**河村** もともと商売屋の件で、だから入ったのも商学部なんですけど、死んだ親父が言うには、わが家は尾張藩士の末裔で、サムライであると。だから、世のため人のために生きねばなら

ん。わしゃ商売は苦手じゃと。無茶苦茶な言いぐさなんですけど、私の大学での発言は、そういう親の元で育ったというせいもあるんじゃないかなあ。世のため人のために役立つという。

**山内** なるほど。それが政治家への道にもつながるんですね。

**河村** いやいや、そうはいつでも、当時の私には家業を継ぐという道しか見えてませんでしたね。従業員が4人か5人という古紙問屋だったんですが、そういうところの長男坊というのは、小さな頃からなんかやと仕事の手伝いをさせられて、家の跡は継がんなんものだとということが体に刷り込まれているというか、トラウマみたいなものになっておって、それ以外の道は目の片隅にも入らなんだんですわ。

**山内** それで大学を出て真っすぐ家に帰っちゃったんだ。

**河村** そうです。商売一途ですわ。まあ、やるからには上場



企業でもつくったれと思ってましたが、古紙業界というのは厳しい世界で、同業者から中卒も一橋卒も関係ないぞよと言われていた通りで、確かに関係なかった。ハハハ。たとえば大学で習った労務管理の手法を使おうと思っても、使う前に従業員が辞めちゃうんですわ。辞めてしまう従業員に対して一橋の学問はまったく適用できませんですよ。副学長の前でこんなことを言うと首を絞められるかもしれんけど。

**山内** それでもけっこう頑張ったと聞いています。

**河村** そりゃもう人の2倍も3倍も働きましたからねえ。ところが、新しい工場をつくらないかんという時に、親父がダメだと言うんですわ。そんなものをつくらしたら同業者の仕事を奪うことになる。同業者とは仲良くせないかん。“和をもって貴しとなす”べしだと。何を寝ぼけたことを言っとるかという話なんですわ、ほうかといつて親父を放り出すわけにもいかんかねえ、かくなるうちは自分が飛び出るしかない。

## どんなに失敗しても 自分のせいにしてらあかん

**山内** そこから司法試験への挑戦が始まったんですね。去年だったか、本学での特別講義でも話していましたが。

**河村** そうです。それまでは頭を下げるばかりの仕事でしたから、この際、頭を下げんでもええ仕事はないかと考えて、

そりゃ検事だろうと。そこで、検察官を目指すことにしたんです。その頃にはすでに嫁さんも子供もおりましたから、昼間は働かないかん。勉強ができるのは夜中と土日だけだったんですが、それでも短答式のほうは一発で受けられました。今にして思えば、それがいかんかった。甘く見たんですわ。東京に出て受験勉強に専念するということも考えたんですが、まあ、ええわ、そこまでせんとて受かるわと。結局、トータル9年間で短答式は4回受かってますが、論文式のほうはついに突破できなかった。予備校での成績はいつもトップクラスだったんですがねえ。

**山内** その頃に今の法科大学院のような制度ができていたら、結果もちがったでしょうにね。

**河村** それです。それが政治に転換した大きな要因の一つです。わしらのように法学部は出とらん、夜しか勉強できんという人間の人生再挑戦、アナザーチャレンジには、それをサポートする社会的な仕組みも必要だと。そういう仕組みをつくるのは政治だというわけ。9年も10年も失敗しつづけると、人はもろいもので、全部自分のせいにしてしまう人が多いんですが、それはちがうんです。失敗したら、それは世の中が悪いからだ、そう考えないかんのですよ。これ、けっこう大事なことで。

## 人生に行き詰まった時には 選挙がおすすめてです

**山内** それにしても、そこから政治家を目指すというのは、相当に思い切ったアナザーチャレンジですね。

**河村** いや、人生の土俵際でうっちゃるには、選挙はええんですよ。なにしろ、一発通ってまやええんだ。これは一橋の後輩諸氏にもぜひ頭に入れておいてほしいんですが、人生に行き詰まった時には選挙がおすすめてです。政治家になるのは、た



日本のリーダーが語る  
世界競争力のある人材とは？

### 河村たかし（かわむら・たかし）

1948年名古屋市生まれ。72年一橋大学商学部卒業。家業の古紙回収・卸売業に従事。中小企業の辛酸を体験。77年頃から検察官を志し、家業のかたわら夜学にて勉強。司法試験を9回受験、短答式では4回合格するもついに二次試験を突破できず、政界入りを目指す。2度の落選を経て、93年の衆議院議員選挙で初当選。以降、日本新党、新進党、自由党などを経て民主党に参加。議員宿舎の廃止、議員年金の廃止、議員ボランティア化などを主張。2009年国會議員を辞し、市民税の減税と都市内分権を2大公約とする「庶民革命」を掲げて名古屋市長選に出馬、大差で当選。主な著書に『おい河村！おみやあ、いつになったら総理になるんだ』（ロングセラーズ）、『この国は議員にいくら使うのか』（角川SSコミュニケーションズ）など。

たとえばラーメン屋さんになるよりはずっと簡単です。

**山内** そんなものですかねえ。

**河村** だって、ラーメンの味はだれにだってわかる。競争相手も多い。うまいラーメンをつくりつづけなければお客は来ない。ところが選挙は、この候補者がどんな人間か、さっぱりわからん。共通一次のような選抜試験もありゃせん。だから



ロクでもにゃあ奴でも通ってまう。まあ、なかには立派な人もおりますがね。

**山内** しかし、落選することもある。

**河村** ほくも2回落ちてますけど、あきらめずに、それなりのスキルを磨けばいいんですよ。今は小選挙区制になって、なおのこと通りやすくなってる。

**山内** それはいいアドバイスかもしれない。ウチの学生は全体にちょっとまっとうすぎるくらいがありますから。ほくもそうだけど。

**河村** 副学長がまっとうでなけりゃどうなりますか。人間、まっとうであるに越したことはにゃあですわ。そういうことも踏まえて、もう一つ、選挙がええというのは、議員になりさえすればメシが食えるんですよ。外国では基本的に政治はボランティアなんですけど、日本では私腹を肥やすために政治家になるという選択も成り立つ。それではいけませんよという法規制はありま

すが、実際には今の世の中、税金を払うほうの苦しみを知ってか知らずにか、税金で食っておるほうは極楽なんです。こんなことをいうと、山内さんなんかにはひと言あるかもしれませんが。

**山内** 国立大学法人もかなりの部分は税金で運用されているけれど、毎年、予算が削減されていて本当に大変ですよ。

**河村** ハッハッ。まあ、大学の先生はええとしましょう。それなりのスキルと役割をお持ちですから。とはいえ、それでも極楽の身分であることにはちがいない。

## 権力の座を不安定にするために 編み出された2大発明

**山内** 生きる手だてとして選挙があるということは、そういう考え方もあるんだろうと思いますが、では選挙に通ったとして、政治家の仕事って、どういうものなんですか。

**河村** これは本にも書いたことですが、ある日、議員が一人残らず死んだとしましょうか。しかし、それで電気や水道がとまるかといったら、そんなことはない。コンビニやファミレスが閉まるわけでもない。公共サービスは役所がやっておる。議員が死んだって何も変わらんのですよ。つまり、政治というのは、なくてもいいものなんです。基本的にはね。

**山内** なるほど、そこから出発するんですね。なくてもいいけれど、あるのはなぜかと。



### 山内 進 (やまうち・すすむ)

1949年北海道小樽市生まれ。72年一橋大学法学部卒業。77年同大学院法学研究科博士課程単位取得退学。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。06年より副学長(総務、財務、社会連携担当)を務める。専門は法制史、西洋中世史、法文化史。『北の十字軍』(講談社)でサントリー学芸賞受賞。その他『新ストア主義の国家哲学』(千倉書房)、『掠奪の法観念史』(東京大学出版会)、『決闘裁判』(講談社)、『十字軍の思想』(筑摩書房)など著書多数。

**河村** そこから問い直しますと、政治の場合は安全保障というどえりゃあネタが一つありますけれど、それは別格としまして、議員に求められる一番の仕事は、端的に言えば、税金を減らすことなんです。税金を減らせんような政治は意味にゃあんです。なくてもいいんです、そんな政治は。

**山内** ほう。昨今は増税もやむなしという論調が強いようですが。

**河村** そういう話にだまされたいかんのですよ。そもそも政治の歴史というのは、徴税者に対する納税者の反抗の歴史です。徴税する側の権力者が固定化し、王様化しますと、贅沢三昧をして納税者を苦しめる。戦争もやらかす。そこで、そういう王様みたいな権力者をつくりださないために人類が編み出した大発明が、選挙制度なんです。

**山内** 納税者が、時に応じて徴税者の首をすげかえる。それが選挙だと。

**河村** そういうことです。おまけにもう一つ、任期制という大発明もした。選挙に通っても一定の期間で有無をいわず辞めさせてしまうという。いずれも、権力の座を不安定なものにしようという人類の叡知が生み出した偉大なる発明です。ここからどういう答え



が導きだされるかといえば、議員は政治を生活の糧にしてはならないということです。こんな不安定な身分ではやっとなん、食うのもカツカツで、はよ辞めたい、というようにならんとウソなんです。そうやって初めて議員のなすべき仕事の本質が見えてくる。



## 減税をしないかぎり 税金のムダづかいは無くせません

**山内** 私利私欲を捨て、世のため人のためにつくせというわけですね。お父上の遺訓を思いおこさせますが。

**河村** まあ、三つ子の魂百までといいますからねえ。ともあれ、言っておるだけではあきませんので、私が名古屋の市長になって真っ先にしたのは、自分の給料をカットすることです。今まで通りだと税込で年収2500万円になるんですが、それを



800万円にした。800万というのは、名古屋市内で継続的に雇用されている市民が60歳になった時の平均年収です。私も60歳で、庶民と同じレベルの生活をする。だから、庶民の側に立った政治ができる。それが自明の理というものです。年収が2500万もあって、おまけに1期4年ごとに退職金が4220万も出る。40年でじゃ

ない、4年ごとに4220万ですよ。そんなご身分で、庶民のための政治なんかできるわけがにゃあんです。

**山内** 市長がそうでも、市の議員や職員の給与は今までと同じなんでしょ。

**河村** 市長が800万なら、ほかも将棋倒しでそれに見合った額になっていきますよ。

**山内** それはきついな。そういう形で税金のムダづかいをなくしていこうということですか。

**河村** いや、そこでみんながつまずくんです。今や党派の別なく税金のムダづかいをなくしようという大合唱をしていますが、たとえば農水省で100億円のムダが見つかったとする。100億くらいは簡単に出てきます。では、その100億円はどこに行くか。

**山内** よく言われているのは、もっと重要な、たとえば福祉の充実に充てるというようなことですが。

**河村** ところがタテ割り行政で、しかも予算は固定化されている。農水省で見つかったムダは、農水省のほかの場所でムダ



づかいされることにしかならんです。たとえ福祉にまわしたとしても、厚労省だってムダづかいの宝庫でしょ。とどのつまり、ムダづかいをなくすには、減税するしかないんですよ。そこに気づくのに60年かかりましたが、減税をせずに、税金のムダづかいをなくす、天下りをなくす、行政改革をするという言説は、すべて大ウソです。

**山内** 減税すれば、おのずとムダづかいができなくなるんだと。

**河村** そういうことです。ですから名古屋市では来年度から市民税の10%減税を実施します。これ、驚くなかれ、日本の地方行政史上で初めてのことです。

## 価格競争のない世界には 進歩も勝利もない

**山内** そういう河村市長から見て、一橋大学はどんな大学に見えますか。賛辞でも、注文でもいいんですが。

**河村** そうですねえ。生徒数は、まあ、少ない方がええでしょうねえ。少ないから結束力が強くて、カンパもしてもらえる。私も選挙に出るたびにずいぶん助けられている。ありがたやあことですわ。それはええとして、授業料はどうなっとりますか。

**山内** 国立大学法人ですから、他大学とほぼ横並びで年535,800円ですね。

**河村** その減額はできんのですか、授業料の値下げは。

**山内** 可能です。下げるのは自由です。逆に増額も20%まではできる。

**河村** だったらただちに減額すべきです。そのぶん副学長の給料も下がることにはなりますが。ハッハッ。そうすると、寄付金集めなんかも今まで以上に力を入れんといかんということになる。寄付をするほうも、だったらもう一口ということになる。

**山内** 授業料はもう少し上げて、より高いレベルの教育をしたほうがいいんじゃないかという人もいますが、それではダメだと。

**河村** ダメです。当たり前です。一橋は「キャプテンズ・オブ・インダストリー」を謳っている。

だったら、みずからもインダストリーの一員として率先して価格競争をせにゃいかん。商売で価格競争をして値下げをしたら、その値下げしたぶんはお客さんの利益になる。だからお客さんに喜ばれ、お客さんが増えて売上げが伸びる。それと同じです。政治における価格競争が減税です。大学における価格競争は授業料の値下げです。なんなら交付金を返上したっていい。本学は国立大学で税金のムダづかいをしていると思われるかもしれませんが、実は私学以上に激しい価格競争をしていますと。それでもたくさんの人に支えられて、教育も研究も世界のトップを走っていますと。だから世界中から優秀な学生や学者も集まってくるんですと。そう胸を張っていえるような大学になるための第一歩が、授業料の値下げです。

**山内** 国立大学の法人化に伴って本学も厳しい競争にさらされていますし、お金のムダづかいはしていないつもりですが、とにかくわかりやすい、貴重なアドバイスをいただけたと思います。本日はありがとうございます。



# 2009 一橋大学オープン

Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア～の実像に接した訪問者たち

## 多数の参加希望があったオープンキャンパス

2009年8月11日(火)、一橋大学の2009年度オープンキャンパスを開催しました。オープンキャンパスとは、受験を希望する高校生や保護者の方に、実際に一橋大学に足を運んでいただき、学びの内容を知り、またキャンパスの環境や雰囲気を感じていただくためのものです。大学紹介、学部説明、各学部の模擬講義、学生による受験相談やキャンパスツアーなど、さまざまな企画が盛況のうちに終了しました。

対象は高校生や既卒者、また、保護者や高校の先生。キャンパスのキャパシティの関係で、インターネットによる予約制としています。募集開始初日の6月29日から非常に多くの応募があり、すぐに定員の3,800人を超えたため、短期間で受付を終了することとなりました。そこで、今年度から、オープンキャンパスで行った企画の内容を、映像化して本学ホームページで配信することにしました。

プログラムは、午前中に大学紹介を2回、昼食時間を挟んで各学部説明を午前午後の2回開催し、いずれも盛況でした。また、9:00～15:50には図書館見学、9:30～14:00には学生によるキャンパスツアーを開催しました。学生による受験生相談会も9:30～15:00に開催し、人気を呼びました。

### ●参加申込者学年



### ●参加申込者地域



# キャンパス



## 顔の見える一橋大学としての情報発信

オープンキャンパスは年1回ですが、  
受験生が一橋大学を知る機会のほかにも用意されています。

### 自由見学

個人でキャンパス見学をしたい高校生や保護者、高校の先生などは申込み不要で、キャンパス内の見学ができます。ただし、期末試験や入学試験、大学のイベントなどがあるときには入構できないこともあります。また、大学生協は利用できますが、建物内に入ることはできません。資料の配付は、東西キャンパスの守衛所（随時）、学生受入課（法人本部棟1階 平日9:00～17:00）で行っています。

### 学校単位のキャンパスツアー

4月中旬から10月末までの平日9:30～16:40の時間内には、学生によるキャンパスツアーおよび懇談会（質疑応答）を行っています。その場合、高校や予備校といった学校単位での事前申込みが必要ですので、早めにお申し込みください。キャンパスツアー約45分、大学生活紹介約30分、質疑応答約15分のトータルで約1時間半程度。

### 出張大学説明会

一橋大学では、全国国公立・有名私大相談会や主要大学説明会に参加して、大学紹介を行っています。2009年度には、東京、大阪、名古屋、横浜（以上全国国公立・有名私大相談会）、福岡、札幌（以上主要大学説明会）に参加しています。

### 関西アカデミア

2008年3月から、関西エリアを中心にシンポジウムや講演活動を行う一橋大学関西アカデミアを開催しています。2009年11月28日（土）には、大阪国際会議場で「世代間格差～世代間対立から世代間協調へ～」というテーマによる講演会を行う予定です。

### 開放講座・移動講座

「学問と社会の交流」を目的に1954年から開催しているのが開放講座で、毎年6回開催しています。その地方版が移動講座で、毎年春と秋の2回開催しています。

### 大学の各種イベントなど

6月のKODAIRA祭や11月の一橋祭（今年度は10/31～11/2）でも大学説明会や学生の企画する個別相談会などがあり、大学を紹介する機会を設けています。

### ホームページによる情報提供

大学、学部・学科、大学院の紹介はもちろん、オープンキャンパスの内容など、受験生の役に立つ充実したコンテンツを提供しています。

[http://www.hit-u.ac.jp/admission/entry\\_guide/open\\_campus.html](http://www.hit-u.ac.jp/admission/entry_guide/open_campus.html)

# オープンキャンパスでの各学部の取り組み

## 商学部



教授  
中野 誠

「一橋大学商学部は、日本における最高峰のビジネス教育を提供している」ことを、オープンキャンパスできちんと紹介することを主眼としています。説明会では、商学部、大学院経営学修士（MBA）コース、大学院研究者養成コース、シニアエグゼクティブプログラム（HSEP）の4つのコースで、学部から経営者教育までトータルに高度職業人の育成を担っていることを紹介しています。さらに、「ゼミの商学部」として、1年次から4年次までゼミが必修化されていることを強調しています。1年次の導入ゼミで基本を学び、2年次の前期ゼミ（英書講読）で英語文献を読みこなす能力を身に付け、3・4年次の後期ゼミで本格的に専門を究めるわけです。

ミニ講義は、私が「業績格差から見る世界各国の経済システム」というテーマで話しました。企業の財務データを使って、資本主義諸国の企業の個性、各国の経済システムの特徴について紹介。グラフを多用したビジュアルな説明を通じて、学際的で複雑な内容をわかりやすく紹介しました。商学部で学ぶことが、どのような方向性で学生の成長に結び付くかを示しています。（談）



## 経済学部



教授  
塩路悦朗

経済学部のオープンキャンパスでの特徴は、学生による討論会、学生生活に焦点を当てた内容、「日銀グランプリ」受賞者による発表と、「学生」を全面に打ち出すことで将来の自分の姿がイメージできるようにしていることです。具体的には、経済学部で学ぶとはどういうことか？を理解してもらうために、学生によるパネルディスカッションを実施。卒業後も意識してトータルに学生生活を紹介しています。一橋大学では、ゼミは重要な要素のひとつ。経済学部でのゼミナールとはどんなものかを理解してもらうように努めています。また、5年一貫教育についても、学生自身に話してもらうことで、よりイメージが明確になるようにしています。

日本銀行では例年、学生向けコンテスト「日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」として、小論文を募集しており、昨年のテーマは、「わが国の金融を巡る課題と処方箋」でした。昨年その優秀賞を受賞した学生による発表が目玉のひとつ。ほかにも留学生を交え、大学生活の過ごし方など学生に語ってもらうことで、経済学部ではどういう勉強をしているのか、具体的にイメージしてもらっています。（談）



# 法学部



准教授  
コン・ヨンソク

法学部では、法学と国際関係を二つの柱として、法学の素養と国際性を兼ね備えた人材を育成しています。3年次から法学コース

と国際関係コースに分かれるので、その意味やメリットについて説明しました。つまり、法学、国際関係の双方を学ぶことも、好きな方を重点的に学ぶことも、キャリア設計に応じて学ぶこともできるのです。説明会は、大芝亮学部長挨拶のあと、カリキュラム概要説明、模擬講義、学生によるゼミナール紹介、教員・学生による個別相談と続きました。

模擬講義は、例年、各部門の中から、午前午後1コマずつ行われます。今年は、憲法の阪口正二郎教授、国際政治史の青野利彦専任講師が担当。阪口先生は「共生のための法の役割とその難しさ」について具体的事例を挙げながらわかりやすく説明して下さいました。青野先生はオバマ大統領の就任演説を手がかりにアメリカ外交の歴史的基盤について論じてくれました。ゼミ紹介は青木木志ゼミ（比較法）、本庄武ゼミ（刑事法）です。青木教授はNHKの「知る楽」で裁判員制度の歴史を紹介していますし、本庄ゼミでは、実際に裁判員制度について議論をしています。いずれも、タイムリーで話題に富んだテーマが、注目を集めました。（談）



a

m

# 社会学部



教授  
若尾政希

社会学部では、物事の表面だけではなく背景まで掘り下げて、歴史や社会を考えることが重視されています。問題意識

を持って問題を発掘し、解決することができる、創造的かつ想像的な人材を育成しようとしているのです。

模擬講義は2種類用意。1部は環境哲学という今日的な課題、2部は朝鮮史という過去の課題です。私たちは知らず知らずにさまざまなことに囚われて生きています。そうした常識的なことに疑問を持つことによって、新しいものを作り出していけるのです。社会学部が用意する多様なカリキュラムを通して、自分とは何か、何ができるのか、「自分探し」をして欲しいということを伝えました。

別教室では内藤ゼミが製作した社会学部紹介ビデオ「井の中の蛙、社会学部を知る。」を上映しました。これは、社会学部の特徴である個性的な教授陣やゼミナールにスポットを当てて紹介するほか、OB・OGインタビューにより社会学部で学んだことが社会へ出てからどう生かされているかを紹介しているものです。

学部学生による個別相談も人気で、高校生ばかりでなく保護者も相談にみえました。（談）



u

s



# 一橋大学機関リポジトリ

# 「HERMES-IR」は、 多くの可能性を秘めています



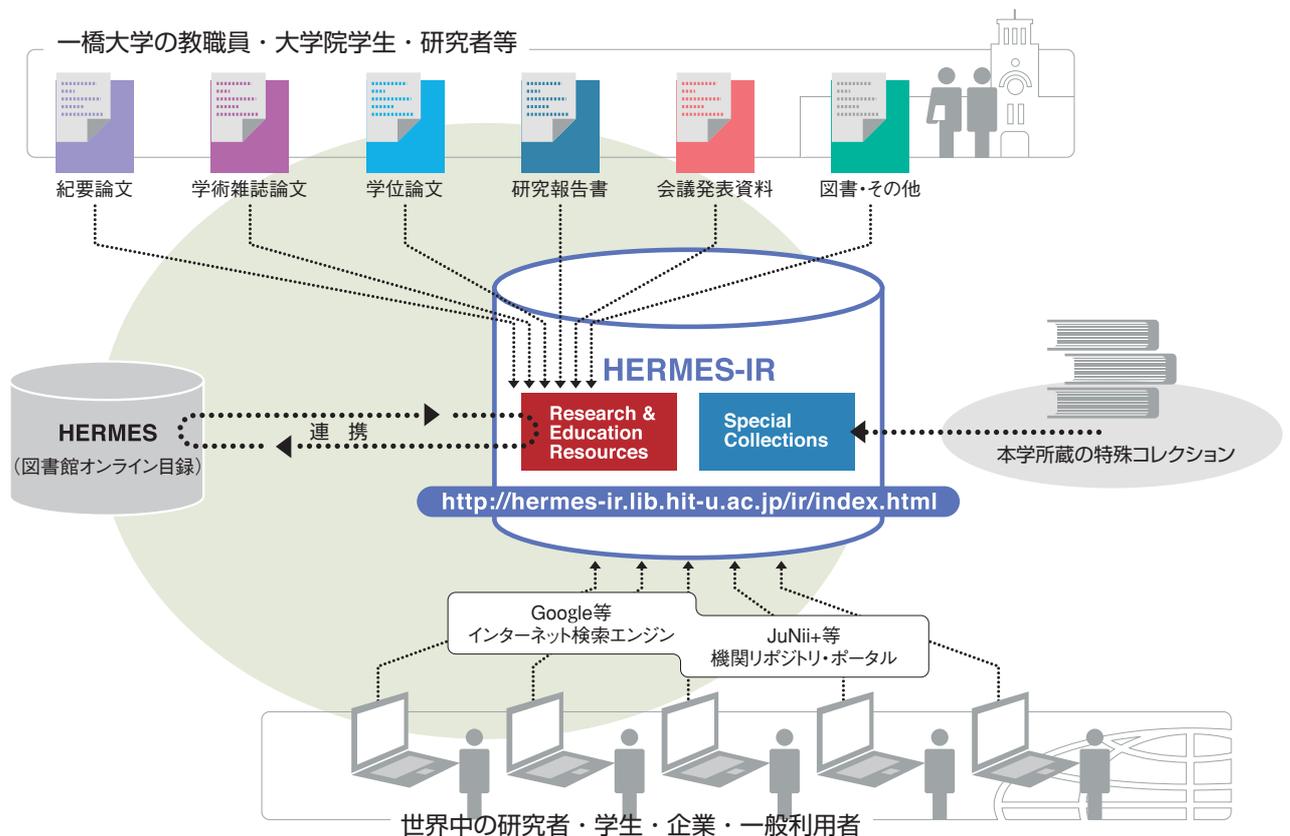
一橋大学附属図書館長  
渡辺雅男 Masao Watanabe

リポジトリとは、もともと倉庫や集積所のことで、宝物を保管しておく場所もリポジトリです。機関リポジトリの定義は、「機関の教員、研究職員、学生により創造された知的生産物のデジタル・アーカイブ」。つまり、どれだけ評価に値する知的生産物が生産されているかが問われるばかりでなく、内外の研究者や一般の人が使いやすいものでなければなりません。最近では、学術研究に活用するデジタル・マガジンの価格が高騰し、研究に支障をきたす場面も増えており、リポジトリへの期待も高まっています。

リポジトリを構築するにあたって配慮を必要とするの

が、著作権の問題です。公開を前提とする以上、著作権の放棄が必要だからです。リポジトリが充実することによるメリットが自分にも返ってくることを理解してもらい、著作権放棄の承諾をもらわなければならないのです。とりわけ、過去の研究紀要などは著者を探して許諾を得るのが大変です。

最近では、学内研究会や研究サークル、科学研究費取得による研究成果などを、著作物となる前のワーキングペーパー、ディスカッションペーパーの段階でリポジトリに載せる動きがでています。仮に著作物にならないものでも、研究成果として外部に向かって発信



する媒体ができたといってもいいでしょう。

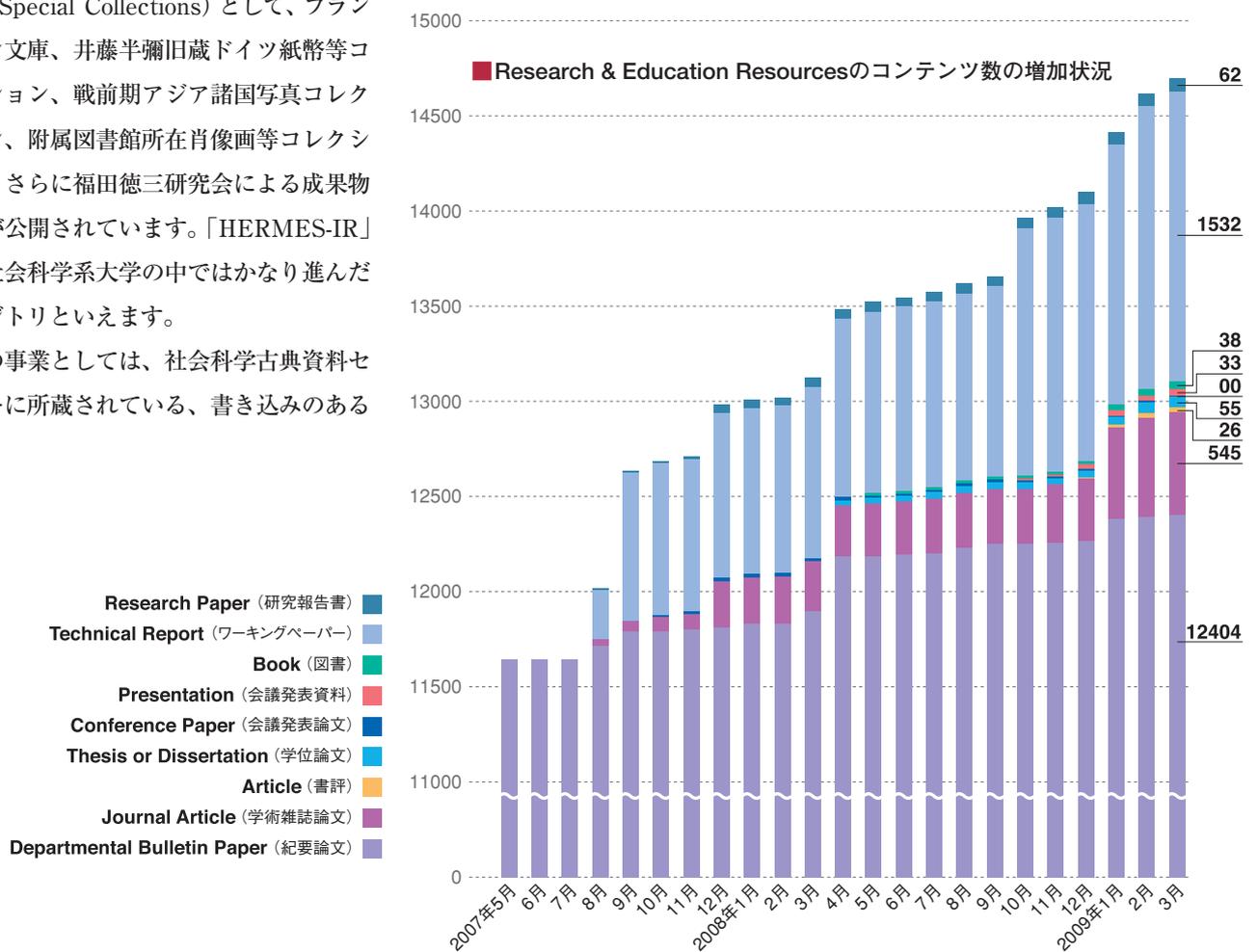
なお、社会学研究科では、研究紀要を紙媒体ではなくリポジトリに発表するようにしました。紙媒体と違って、論文ができた段階で1本ずつリポジトリにアップすればいいわけですから、編集が簡単になります。アクセスも簡単ですし、何よりも印刷費がかかりません。

一橋大学機関リポジトリ「HERMES-IR」には、研究・教育リソース (Research & Education Resources) として雑誌掲載論文、学位論文、紀要論文、研究報告書、図書などが収納されています。また、スペシャルコレクション (Special Collections) として、フランクリン文庫、井藤半彌旧蔵ドイツ紙幣等コレクション、戦前期アジア諸国写真コレクション、附属図書館所在肖像画等コレクション、さらに福田徳三研究会による成果物などが公開されています。「HERMES-IR」は、社会科学系大学の中ではかなり進んだリポジトリといえます。

次の事業としては、社会科学古典資料センターに所蔵されている、書き込みのある

書籍類を映像で公開することを予算化しています。

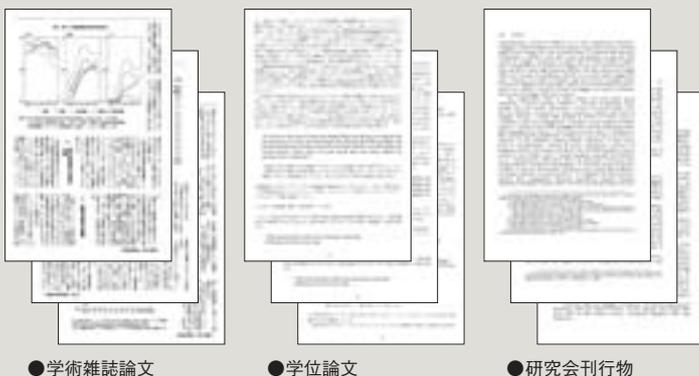
リポジトリの充実によるメリットは、研究・教育活動を発信することで、一橋大学ならではの特徴が社会的に認知されるようになることです。もちろん、国際的な学术交流に寄与することはいうまでもありません。さらに、機関リポジトリポータルサイトのほか、Google経由でもアクセスできますから、収録された論文がどれだけ使われているかといったデータも示されます。研究者にとって、自分の研究成果が社会でどれだけ評価されているかを知ることができるため、よい励みになるでしょう。(談)



「HERMES-IR」に保存されている一例

Research & Education Resources

Special Collections



# 持続可能な機関リポジトリを目指す 一橋大学機関リポジトリ「HERMES-IR」

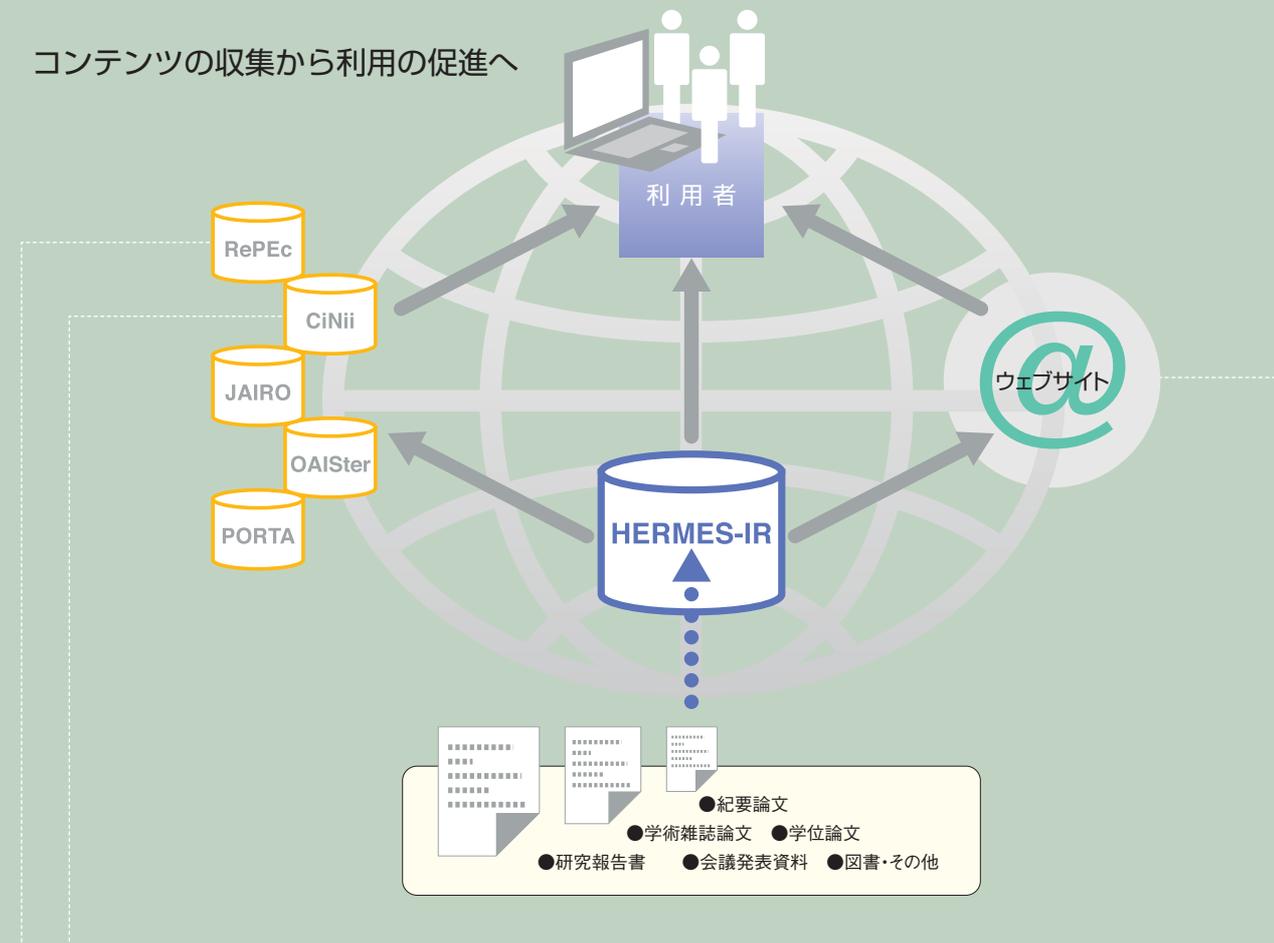
2006年度に国立情報学研究所による次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業－学術機関リポジトリ構築連携支援事業委託事業に採択されて、「HERMES-IR」が構築されました。公開されたのは、2007年5月1日です。一橋大学では、すでに電子図書館システムHDA（一橋デジタルアーカイブス）が稼働していましたから、機関リポジトリとデジタル・アーカイブの2つの機能を生かしたシステムが実現したのです。

こうして、「Research & Education Resources」（機関リポジトリ機能）、「Special Collections」（デジタル・アーカイブ機能）をそれぞれ独立したメニューとして公開することにな

りました。ユニークなのは、福田徳三研究会による機関リポジトリの資料（Special Collections）を利用した福田徳三の研究を行っていること。一橋大学にとって重要な人物である福田徳三の研究を核にして、一橋大学の学問伝統を考えていこうとしているのです。つまり、機関リポジトリを単なる情報の集積所に止めるのではなく、研究の舞台へと発展させようという道筋づくりなのです。

外部の利用促進に向けては、研究者が活用している機関リポジトリポータルサイトや一般的なGoogleからのアクセスを可能としました。

## コンテンツの収集から利用の促進へ



### ● RePEcへのデータ提供

RePEcは1993年にWorking Papers in Economics (WoPEc)として創始されたプレプリントサーバです。その後、Research Papers in Economics (RePEc)に継承され、ワーキングペーパー・雑誌記事・論文などの全文を利用できるものが多数含まれています。経済学分野で認知度の高いRePEcを検索した研究者がHERMES-IR登録論文にアクセスしてくれる可能性が高まることを期待できます。

### ● CiNiiへのデータ提供

CiNiiとの連携によって、雑誌記事索引に採録されていなかった本学の多くの紀要論文が検索できるようになりました。認知度の高いCiNiiに登録した直後に、学内よりコンテンツ登録に関する問い合わせが増えました。

### ● ウェブサイトとの連携

- ◆ 大学ウェブサイトの改修  
大学ホームページにバナーを掲載しました。研究活動案内などのページからHERMES-IRへリンクを作成しました。
- ◆ 福田徳三研究会ウェブサイト  
ウェブサイトでのコンテンツ利用のモデルを提示するために、HERMES-IRに登録された論文や手稿を活用して研究会のウェブサイトを作成しました。
- ◆ 図書館ウェブサイトの改修  
「Quick Search」（簡易検索窓）でHERMES-IRに登録された論文が検索できるようになりました。



# 4年目を迎える『男女共同参画時代の』

2007年10月4日、『男女共同参画時代のキャリアデザイン』（如水会寄附講義）の初の講座が開講されました。

これはジェンダー教育プログラム（GenEP）の目玉講義のひとつで、

男女が互いに認め合い実力を発揮できる社会への理解をキャリアという視点で考えていくものです。

3年目を終了したいま、改めてコーディネーターである西山昭彦氏に、その狙い、学生への期待、今後の展望などをきいてみました。



コーディネーター・講師

東京ガス株式会社  
西山経営研究所長

**西山昭彦氏**

Akihiko Nishiyama  
昭和50年卒（社）

一橋大学社会学部卒業後、東京ガス株式会社入社。ロンドン大学大学院政治経済学科に留学。ハーバード大学政治学大学院に留学し修士課程修了。財団法人中東経済研究所（経済企画庁、通商産業省共管）に外向。社内ベンチャーとして新会社アーバンクラブを設立し取締役。法政大学大学院社会科学部研究科博士後期課程修了、経営学博士。東京ガス都市生活研究所長。法政大学大学院社会科学部研究科客員教授（政策科学専攻）を経て、2004年より東京ガス株式会社西山経営研究所長。今回の講義をまとめた『人生のキャリアデザイン術 あなたの天職が見つかる』（西山昭彦／著 ロングセラーズ刊 定価：950円〈税込〉）など、著書多数。



『男女共同参画時代のキャリアデザイン』は、単なる職業設計といったレベルを超えて、男女共同参画社会のなかで人生設計を含むキャリアデザインを行うための基礎知識や企業や社会に関する理解が増すようなプログラムを展開しています。講座はオムニバス形式。社会で活躍する本学卒業生を中心に、男女共同参画に関わっている人や経営トップに、その実践や課題について人生観を含めて語ってもらいます。社会人の話を聞くわけですから、社会人の聴講マナーを守ってもらっています。

2009年度には、「（1）男女共同参画に対する高い意識と理解を育むこと、（2）企業における男女の雇用、人的資源活用の実態および問題点の把握」を目的に掲げて講座を展開しました。

コーディネーターとして講師の選択にあたっては、「自分が大学に戻ったとしたら、どんな授業が人生を考えるうえで役立つか？」という視点で検討しました。自分の持つ社外人脈のなかから、そのような話をしてくれる講師を選んだのです。人間に

**遠山正道氏**

株式会社スマイルズ 代表取締役社長

スープで、いきます

**山田正人氏**

経済産業研究所 総務副ディレクター

男性の育児休業を  
通して考える

ワーク・ライフ・バランス

**浦部明子氏**

平成10年卒（法）

虎ノ門南法律事務所 弁護士

弁護士の仕事

**平松庚三氏**

小僧com株式会社

代表取締役会長兼社長

Market yourself

**治部れんげ氏・竹内 幹氏**

平成9年卒（法）

日経BP社

「日経ビジネスアソシエ」  
記者

平成10年卒（経）

一橋大学大学院

経済学研究科  
専任講師

仕事・育児・パートナー選び

**家本賢太郎氏**

株式会社クララオンライン 代表取締役社長

僕が15歳で社長になった理由

**森 健氏・瀬谷貴子氏**

昭和45年卒（社）

株式会社電通  
執行役員

昭和63年卒（商）

株式会社電通

ストラテジック・プランニング局

ブランド・コンサルティング室

コンサルティング部部长

男と女と中高年と若者と

**広岡守穂氏・広岡立美氏**

中央大学法学部

教授

石川県議会議員

自己実現と男女共同参画

**湯畑伸世氏**

株式会社アルク教育社

教育ネットワーク部長

緩急自在な

コミットメント力が

パワーの源泉

**植山周一郎氏**

昭和44年卒（商）

国際経営コンサルタント 作家

国際ビジネスパーソン

養成講座

**丸川珠代氏**

参議院議員

キャリア人生の理想と現実

**林 文子氏**

東京日産自動車販売株式会社

代表取締役社長

ビジネスの未来を拓く

～男女協働を力に～

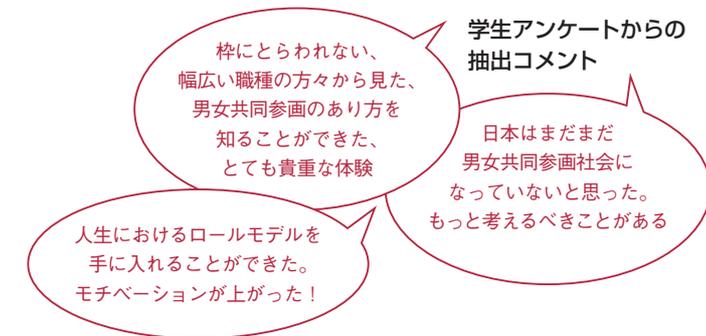
※講師の方々の肩書きは講義実施時のものです。

# キャリアデザイン』

は相性がありますから、同じ言葉でも誰が発したかで感銘を受けたり、受けなかったりします。重要なのは、講師の言葉から多くのヒントを得ることですから、オムニバス形式でさまざまな人と接することで、自分の人生設計に役立つ「良いとこ取り」が可能になるのです。気になるころがあれば真剣に考えて、自分のものにしてしまえばいいのです。本当に感銘を受けると、授業を聞いた翌日から生き方が変わることもあります。実際に、「明日から（授業でアドバイスのあった）『人生ノート』つけます」と言った学生や「ガチガチの弁護士志向でしたが、もっと柔軟に進路を考え直してみます」と言ってきた学生もいます。

大企業の経営者（現横浜市長）である林文子さんの少女時代は経済的に恵まれず、彼女は12歳のころから夏休みは働いていました。このハングリーさが成長のバネになりました。いまの学生は恵まれすぎてハングリーさに欠ける面があります。

『Forbes』に「世界で最も影響力のある女性100人」という



企画がありますが、一橋大学出身者が載っていないのですが、林さんは2005年度66位でした。自分たちは恵まれているところからスタートしているのになぜなのか、と感じてほしいですね。

講座としては、年ごとにますます中身が濃くなっています。毎年講師は入れ替わりますが、その人の人生が多くの学生にインパクトを与え、余人をもって代え難い人には引き続き講義を担当していただいています。

自分の学生時代と比べると、情報化社会にあるいまの学生は真面目で賢くなっています。目的に向かって進む力もあります。その分、ムダから生まれる遊びやクリエイティブなところが落ちて見えるように見えますが……。

男女共同参画はまだ過渡期です。学生がその課題を理解し、自分のキャリアをどうデザインしていったらいいかを考えるヒントを、この講座を通じてこれからも提供していきます。（談）

# よく分からなかった、だからやろうと思った ——ヴァレリー、読むこと、そして書くこと

## 最も大切なのは内的作業で、 後はその知的応用に過ぎない

朝早く起きて、コーヒーを飲み、タバコをくゆらしながら思索に耽る。この『カイエ』を紡ぐ早朝のひとつこそポール・ヴァレリー（1871～1945年）にとって最も重要な時間でした。『カイエ』とは、自分のためのノートのこと。「一番大切なのは『カイエ』を書くという内的な作業で、後のものはその知的応用に過ぎない」とは彼自身の言葉です。公表された作品やエッセーは、『カイエ』の応用問題だったわけです。ですから、この重要な『カイエ』——電話帳のような本にまとめられ29冊あります——をヴァレリーは、戦争中もリュックサックに入れて疎開させています。

もっとも、発表するものは「内的作業の知的応用」に過ぎないという形で、自分を売り出したともいえます。当時は、ルソーが『告白』で赤裸々に自らを描き出してからすでに100年以上経ったころ。文学的意識の高い作家は普通の「私語り」で書くことはもう不可能でした。友人のジッド\*も自己暴露的なテキストを発表していましたが、露出過多でかえって彼の

本当の姿が見えなくなる、というカラクリが仕込まれています。これに対してヴァレリーは、露出が少なすぎて姿が見えない。ジッドとは正反対のやり方で社会との関係を持つとしたのでしょう。

ポール・ヴァレリーは詩人として出発して、批評家としても活躍した人です。日本への影響では、小林秀雄が批評家として影響を受けています。小林秀雄は若いころ、自分の批評の言葉を作るときにヴァレリーをととても参考にしました。

\*アンドレ・ジッド（1869～1951年）：フランスの小説家。  
『新フランス評論（NRF）』創刊者の一人。

## 〈第三共和制の知性〉として ヨーロッパの危機を生きる

ヴァレリーはセット生まれで、モンペリエという地中海に面した街で育ちました。モンペリエ大学の法学部で学んだ後、20代前半にパ

リにて、文学的放浪者のような生活をします。文学者の仲間に入っていたのですが、生活のために1897年に陸軍省に就職しました。文学者には、そうした慣例のようなものがあつたのです。しかし、それも気に入らず、1901年には辞めてしまいます。そして、その後は長くアヴァンス通信社重役の個人秘書として務めていました。〈若いときには気の利いた詩を書いていたが、近ごろは消えてしまった〉といった存在だったのです。

それが、1917年に長篇詩『若きバルク』を発表したところから有名になり、〈第三共和制の知性〉とか〈ヨーロッパ知性〉の代表のようにいわれるようになりました。二つの世界大戦の間、1920～30年代が、彼の華々しく活躍した時代です。

当時は「西洋の没落」や「精神の危機」が語られていたことから

も分かるとおり、第一次世界大戦の荒廃でヨーロッパが自信を失っていました。そんなときに、ヴァレリーが非常に複雑で華麗な文体で書かれた作品とともに登場し、フランスの上流階級や知識人の心を捉えたのです。

その理由の一つに、ヴァレリーが古典的な詩を書いたことが挙げられます。『若きバルク』は、「アレクサンドラン」（12音綴詩句）という最も伝統的な韻律で書かれています。戦争で負



『カイエ』より。ヴァレリーは個人的なことを公にすることを嫌っていました。自己韜晦（とうかい）があつたのです。そこで、自画像を描いても半分消してみたりしたのでしょう。消したところから顔が少し透けて見えているのがミソでしょう。

けてフランス語が危機に瀕するのではないかという意識がヴァレリーにはあり、フランス語の「墓標」として彼は『バルク』を書いたのでした。もっとも、そこに盛り込まれているものは、現代人の複雑な内面世界で、近代以降の人間が生きることを強いられた分裂した意識のありよう——とりわけ、情念と知性が交錯する中で現れる錯綜した時間意識——が、力業で古典的形式にまとめ上げられているのです。また他方で、文学や絵画、政治など多様なテーマについて書かれたエッセーは、レトリックの技法を駆使してアクロバチックに構築されており、フランス語の表現の可能性を徹底的に突き詰めたものでした。

第一次世界大戦が終わるころからヨーロッパ自体が疑問に付され、ダダイズムが伝統的価値観を否定し従来の表現形式や言語形態を破壊したところで、1920年代以降のシュールレアリスムの時代を迎えます。彼らは既成の権力や制度に対して挑発的でした。そうした伝統批判の前衛芸術運動を一方に置いてヴァレリーを位置づけると、彼の営みの複雑さが立体的に見えてきます。つまり、その内容はきわめて現

代的でありながら、フランス語の伝統をも引き受け、両者を作品の中に統合しようとした姿が見えてくるわけです。

## 一流の詩人が思索を深めて批評する凄み

ヴァレリーの凄さは、実作者として自分で詩を作るところから出発して考えたところにあります。一般的に批評家は自分では作品を作りません。ヴァレリーは一流の詩人であり、詩を書くときの種々の困難をリアルな経験として自分の中にもっていたわけです。この体験こそ、彼の批評の原理となり、彼はそれと引き比べて対象を判断していたといえると思います。よくある批評は、自分が一番偉い、モノが見えているのは自分だけだ、というスタンスで対象を上から評価するようになってしまいがちですが、ヴァレリーは理論的、抽象的に語るときでも、その言葉は内的な経験にきちんと裏打ちされています。

彼の師匠はステファヌ・マラルメ (1842～1898年) という象徴派の詩人です。このマラルメとアルチュール・ランボー (1854～1891年) とが先行世代としてははずば抜けた存在でした。ヴァレリー自身も一流の詩人ですが、自分は彼らのレベルまで至らないのではないかと思ひ悩みます。そこで彼は実作を離れ、文学そのものについて理論的に考え始めたわけです。文学は言葉で作られる、では言語とはなにか、言語は精神の現象の一つである、では精神とはなにか。こんな風に彼の思索は深まっていき、やがて心理学や社会批判などにも至ります。こうした思索を書き留めたのが『カイエ』で、1894年から1945年に亡くなるまで50年間書き続けられました。

## 歴史的文脈を再構築してヴァレリーに迫る

『カイエ』は断章であって、そこだけ読んでもよく意味は分かりません。これまでの研究では、いろいろな引用を集めてきてテーマ別に分類して考えていました。しかし、それでもよくは分からないのです。そこで、学位論文にまとめた研究では、思想史的な文脈を再構成して、その中にヴァレリーの書いた断片を置いていくという方法を取りました。ジークムント・フロイト (1856～1939年) やベルクソン\*\*など他の思想家たちと共有していた思想の空間、言説空間を再構成してその中にヴァレリーを置くと、他の思想家たちとの関係も分かりやすくなります。

例えば、フロイトは「無意識」を強く打ち出して精神分析を創始しましたが、従来、ヴァレリーとフロイトの関係を論じるときには、精神分析の手法でヴァレリーを読むというのがほとんどでした。そうではなく、ヴァレリーもフロイトも同じ知的雰囲気の中で、それぞれ同じ枠組みから出発して、フロイトは精神分析に、ヴァレリーは自分の詩学に至ったという風に考える方が歴史的にも正確だし、いろいろと見えてくるものもあります。フロイトでヴァレリーを読むというのは、あまり生産的ではありません。精神分析で読めば、

精神分析の結論しか出てきませんから……。

フロイトは1885年にウィーンからフランスに留学したとき、高名なジャン＝マルタン・シャルコー (1825～1893年) のもとで学びました。シャルコーは神経学を専門とする医師で、ヒステリーの研究もしていました。フランスではその後、1920年代に精神分析が受容され流行するまでは、シャルコーの流れをくむピエール・ジャネ (1859～1947年) の理論が主流でした。ジャネ流の無意識は「下意識」と呼ばれますが、フロイトとは違う形で考えられています。歴史的に研究すると、ヴァレリーの思想はフロイトよりもジャネに近いことが分かり、問題をもっと正確に理解することができるようになりました。

\*\*アンリ・ベルクソン (1859～1941年)：フランスの哲学者。

## 書くことの意味

小林秀雄について本を書いたことがあります。そのとき、小林秀雄については「分かった」と思いました。ほぼ見えた、という実感があったのです。しかし、ヴァレリーはよく分かりませんでした。その「分からないところを分かりたい」というのが、ヴァレリー研究に本格的に取り組むキッカケになったといえるかもしれません。こういう〈謎〉を嗅ぎ分ける嗅覚は学生のみなさんにも磨いてほしい能力です。

ヴァレリーの詩人としての実感、詩の制作にまつわる困難な体験こそ、彼の文学批評の基礎だったわけですが、20代のときはそこがまったく見えていなかったのです。その点については、自分自身が本を一冊書いて初めて実感として納得できました。本を書くことは、ごちゃごちゃしたアイデアのカオスを、選別・整理してまとめていくという力業です。つまり、無秩序と秩序を媒介することです。書く主体は、このつなぎ合わせる作業の中で生まれ、成熟します。そのプロセスは言葉にはできません。言葉で表現できるということは、もうまとめあがっているということですから……。これは実際にやってみなければ分からない体験的知識ですね。文学研究は資料を読むことだけでやるように見えますが、試行錯誤して書く体験こそが決定的に重要でした。よく読めるようになるためにはよく書けなければならないようです。(談)



言語社会研究科准教授

森本淳生

Atsuo Morimoto

1970年東京生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。ブレス・バスカル＝クレルモン第二大学博士(フランス文学・文明)。1996年9月、京都大学人文科学研究科助手。2005年9月、一橋大学大学院言語社会研究科助教授(2007年4月より准教授)。この間、バリ第十二大学、エコール・ノルマル・シュベリウール、国立科学センター近現代テキスト草稿研究所ヴァレリー・チームで研修。著書に『小林秀雄の論理——美と戦争』(2002年、人文書院)、『未完のヴァレリー——草稿と解説』(田上竜也氏と共編訳著、2004年、平凡社)、*Paul Valéry. La genèse du sujet et l'imaginaire. De la psychologie à la poétique* (Minard - Lettres Modernes, 近刊) がある。

再審制度が有効に機能するかどうか、  
刑事裁判のあり方を決める鍵になる

## 再審請求の際に 秘密の接見が認められない不思議

刑事訴訟法のなかで私の関心は、弁護人とのコミュニケーションの保障など、逮捕、勾留されて身体の自由を奪われた被疑者・被告人の地位や権利の問題にあります。被疑者・被告人と弁護人の接見には施設の職員の立ち会いが禁止されています。どういった打ち合わせをしたかが漏れることで自由な話し合いが抑制されないようにするために、刑事訴訟法に明文化されています。最近では、鹿児島県の選挙違反の冤罪事件で、面談した内容を取り調べて聞き出したことが違法とされて、国家賠償が認められました。

無実の人を冤罪から救済するために再審制度があります。再審請求をする際には、刑事訴訟法で弁護人の援助が受けられることを保障しています。身体を拘束されている人が、自分で判決を覆すだけの新しい証拠を集めて再審請求することはほとんど不可能です。ところが、選任した弁護人と請求人の接見には秘密性の保障がありません。帝銀事件の再審請求では、接見に立ち会った際の資料を裁判所が請求棄却の判断材料にしました。

冤罪は最大限予防されなければなりません。しかし、人間に絶対はありません。無実の人を冤罪から救う再審制度が有効に機能しなければならないのです。再審制度こそ刑事裁判の鍵といってもいいでしょう。刑事訴訟が国民に信頼されるためにも、それが重要です。人間の行う裁判には必ず過ちが起こり得ることからすれば、死刑制度には重大な疑問があります。実際に、死刑が確定後に再審の結果無罪となったケースが4件あります。ちなみに、その再審請求のための接見にも、施設職員の立ち会いがしていました。

## 白鳥決定が開いた 再審請求への道

もともと再審が認められるのは、真犯人が発見されたなど、極限的な場合に限られていました。1975年、最高裁判所の白鳥決定により、再審開始の判断においても「疑わしいときは被告人の利益に」という刑事裁判の鉄則が適用されることになりました。しかし、再審請求の手続きに関しては、ほとんど規定がありません。

無実の人を冤罪から救う再審という制度が十分機能するかどうかは、再審の開始が決定された後の再審公判よりも、再審を請求する段階で、むしろ請求までのあいだに、どれほどしっかりと準備できるかによって決まります。請求人と弁護人が相談しながら、確定した有罪判決を吟味し、その弱点を見つけ、有罪を崩す新しい証拠を集めていくわけです。無罪を示す新しい証拠を提出するために、十分な調査が必要になります。そのとき、弁護人が請求



人本人から詳しく事情を聞くことが重要です。そこでの発言が誰にどう使われるかわからないといった心配をせず、自由に話し合えるように秘密性の保障が不可欠です。被疑者・被告人に秘密の接見が保障されているのと同様、再審請求のときでもそれが認められるべきなのです。

## 国際的な人権保障の視点で ナマ身の人間を捉える

国際的な人権保障の枠組みのなかで、日本の刑事司法をどう捉えるかという視点も重要です。今年、「国際人権法」という授業を、ロースクールで担当しています。戦争のない平和な社会を築くには人権が十分保障されていなければなりません。この考えのもと、国際法による人権の保障が戦後目覚ましく発展しました。たとえば世界人権宣言を条約化した国際自由権規約は、日本の法律同様、裁判のルールとして積極的に使われていくべきでしょう。下級審にはそのような動きがみえますが、最高裁はなお消極的です。

国際人権法の水準でいえば、刑事、民事を問わず、裁判へのアクセスを保障するために、法的な問題について拘禁されている人が弁護士と相談するときには秘密が守られます。手紙も同様です。電話も相手が弁護士とわかった場合には、モニターしません。グローバルスタンダードでは、「秘密性こそ命」なのです。その点で日本は遅れています。とりわけ、再審請求という緊迫した話し合いの場は秘密が保護されるべきです。

弁護人の援助を受ける権利の実質化という点では、この「自由な秘密の接見」と「国選弁護」が重要になります。国選弁護の保障がないため、熱心な後援者がいる場合などを除き、再審請求のために弁護士の援助が受けられないケースがほとんどです。

再審は、確定判決の権威と生きている人間の尊厳とのせめぎ合いなのです。本当の意味の裁判所の権威は、確定判決に拘泥することではなく、誤りがなければどうかをつねに点検し、誤りがあれば速やかに正していくところにあると思っています。

刑事裁判も少年審判も、そこに登場するのは決して強いなまの人間です。自分がやっけていなくとも、厳しく責められれば白してしまうこともある弱さをもった人間なのです。こうした弱い人間を押しつぶしてしまうのではなく、弱いままで大切にされる仕組みづくりが重要なのです。主役は被疑者・被告人であり、少年です。弱さをもった人間を大切にできる手続きでなければなりません。

繰り返しますが、刑事裁判のなかで、弱さをもった人間が大切にされるためには、冤罪を着せられた無実の人を確実に救済できるよう、再審制度が有効に機能しなければなりません。再審が刑事裁判全体のあり方を決める鍵だというのは、この意味からです。

## ヨーロッパ人権裁判所にみる 人権保障の重み

ヨーロッパには、国際自由権規約のベースともなったヨーロッパ人権条約があります。その批准がEU加盟の条件となっています。かつてイギリスでは、刑事手続のなかの被疑者・被告人や、刑務所・拘置所に収容された人の権利水準が低かったのですが、1980年代から、ヨーロッパ人権裁判所のリードによって、イギリス国内の改革も進んでいきました。

イギリスでは、殺人については10歳から刑事裁判にかけられ、刑事責任を問われます。1993年にイギリスで10歳の少年2人が、2歳の男児を誘拐して残酷に殺害した事件がありました。マスコミに「悪魔の子」とまで書かたてられ、社会的にたいへんな騒ぎになりました。地元リバプールでは公正な陪審裁判ができないとして、別の場所に移して裁判を行ったほどです。大衆紙の呼びかけで、終身刑を求める署名も30万人以上集まりました。当時のイギリス社会の荒廃を象徴する事件とも受け止められました。

大人と同様、陪審裁判が行われ、その結果、殺人罪で有罪。刑は無期徒刑です。当時イギリスでは、最低拘禁期間は裁判官の勧告により内務大臣が決めることになっていました。裁判官は10年と勧告したのに、厳罰を求める世論に配慮して内務大臣は15年と決めました。少年2人がヨーロッパ人権裁判所に救済を求めたところ、人権条約に違反するという判断がされました。まず、内務大臣が刑期を決定するのは、独立した裁判所の裁判を受けたとはいえない。そして、若い少年が大人と同じ陪審裁判で裁かれ、自分の裁判なのに理解も参加もできない状況で、しかも衆人環視のなかで脅迫的な手続きが進められたのは、公正な裁判とはいえない——という判断です。これは少年だけの問題ではありません。すべての被告人に、自分の裁判をしっかり理解し、主役として裁判に参加できるよう保障する必要があります。手続き参加の保障が、公正な裁判であるための条件です。

日本でも裁判員裁判が始まりました。被告人が理解し、参加できるような裁判でなければなりません。犯罪に対して法的制裁は必要ですが、犯罪の疑いのある人、犯罪をした人だからといって、その人から人間としての尊厳を奪ってしまうことは許されません。(談)



法学研究科教授

葛野 尋之

Hiroyuki Kuzuno

1961年福井県生まれ。1985年一橋大学法学部卒業。学生時代は剣道部に所属。1990年一橋大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学。静岡大学助教授、立命館大学助教授・教授を経て一橋大学法学研究科教授。博士(法学)。著書は、『少年司法の再構築』(日本評論社)、『刑事手続と刑事拘禁』(現代人文社)、『少年司法における参加と修復』(日本評論社)、『刑事訴訟法講義案』(法律文化社)など。

連載企画

世界を解く

第十六回テーマ

「決める」

学ぶ、働く、遊ぶ…。

人間は日々、さまざまな行為を営んでいます。どれも一見、ごく当たり前のこと。

国境も地域も、民族も歴史も、時間も空間も超えて、

普遍的に存在しているこれらの行為は、その普遍性ゆえに見過ごされてしまいがちです。

しかし、例えば「学ぶ」という行為の本質を深く掘り下げ、

さまざまな角度から「学ぶこと」の意味を問うたとき、

そこには驚くほど豊かな世界が現れてきます。

学ぶことの社会的意味とは、その歴史的経緯が伝える価値観の変遷とは、

学びの経済効果と社会システムとの関係とは、等々。

ごく当たり前の行為は、その相貌を一変し、生きるという営為の本質に迫る、

あるいは社会と人間のあり方の原点を理解する、貴重な手がかりとなるのです。

本特集企画は、こうしたキーワードにスポットをあて、そこから浮かびでる多様で豊かな世界を、

それが示唆する多くの問題点をありのままに考えていきます。

第16回のテーマは、「決める」。

異なる専門領域、視点をもつ研究者たちに、

それぞれの立場から「決める」という言葉が連想させる今日的諸問題を語っていただきました。

## e s s a y 「偶然に身を任せて」

言語社会研究科教授 ● 糟谷啓介

作曲家のジョン・ケージは、易経を使って音を偶然のままに生起させるような作曲のやり方を発明した。名づけてこれを「偶然性の音楽」という。ケージは「当たるも八卦、当たらぬも八卦」と唱えながら曲を作ったのかもしれない。わたしに音楽の素養はないが、このやり方なら覚えがある。むかし試験でどの答えを選べばいいかわからないとき、机の上に鉛筆をころがして、書くべき答えを決めていったものだった。こうしてわたしは「偶然性の答案」を作るのを得意としていたのだが、手法があまりにも前衛的だったせいか、採点者にまったく評価されなかったのは、かえすがえすも残念である。

たしかに偶然性による決定は、いろいろなことに使うことができる。事実、ケージは日常生活のなかで困ったことに出あったとき、よく易経を用いて選択肢を決めていったらしい。なるほど、何を選べばいいのか迷ったときには、無理やり結論をしばり出して失敗に終わるよりは、偶然に身を任せた方がいいかもしれない。何事も「当たるも八卦、当たらぬも八卦」である。

そうはいつでも、このやり方があらゆることに応用できるわけではない。ケージといえども、森で見つけたキノコを食べるべき

か否かを決めるときに、易経に頼ることはないにちがいない（ケージは名だたるキノコ研究者である）。食べられるキノコと食べられないキノコの区別は偶然が決めるのではなく、キノコそのものの性質が決めるのである。物事の道理で決まっていることについては、偶然性の診断は役に立たない。

「決める」とは、いくつかの選択肢のなかから一つを選び出す行為であるとするなら、そのとき大切なのは、物事の結びつきをはっきりと見通すことである。そして、ぎりぎりのところまで見極めたあげく、それでもなお筋道が見えてこないなら、にっこり微笑んでサイコロを振ればよいのだ。わたしたちに偶然と見えるものは、実は必然であるのかもしれない。ただ、悲しいことに、人間にはその間の区別がよく見えないだけなのだ。だから、そんなとき、まなじり決して「決意」やら「決断」やらの剣を振りまわす必要はまったくない。そういう物騒な道具は、実のところ、わたしたちの不明や怠惰の隠れみのにしかすぎないのである。



## 困難な問題には、ずるいことをしないで、 真っ向から取り組む勇気が必要

大事なことを「決める」のは難しいことですが、最近の日本では重要なことになればなるほど議論が迷走して、結局何も決められないということが多いようです。「140兆円」ともいわれる公的年金の積立金の運用方法についても、なかなか議論が深まりません。

### 積極的な運用をするべきか？ 否か？

公的年金の積立金は、現在では100兆円を超える巨額なものになっています。この資金は国内外の株式や債券に投資されているのですが、2008年度は世界的な株価下落の影響で、10兆円近い赤字になりました。“リーマンショック”の前までは、産油国や中国などのいわゆる国家ファンドであるとか、カルパースやイエール大学の年金基金などが行っている積極的な運用姿勢をまねるべきだという意見もよく耳にしました。いろいろな意味で世間の注目を集めている問題ですが、「もっとリスクをとれ」、「いや、リスクはとるな」という両極端な主張が繰り返されるだけで終わってしまうことが多いようです。

積立金の役割ですが、基本的には公的年金の資金流出・流入のアンバランスを解消するために使われるものです。深刻な少子高齢化のため、将来の保険

料収入だけで給付をまかなおうとすると将来世代の負担が重くなりすぎます。そこでこの積立金を取り崩してゆき、公的年金制度を維持しようということになっています。年金給付の大切な財源なのだから、運用は安全第一にという意見が強いのはこのためです。高リスク運用を前提に高い運用利回りを想定した方が、年金財政の均衡の達成が容易になりますから、制度維持のための方便ではないかという批判もあります。一方で、積立金の取り崩しが本格的に始まるのは2030年以降とされていますので、この巨額の資金を10年以上も預金しておくのは非効率ですし、インフレ

発生時には積立金が実質的に目減りしてしまう恐れもあります。このため、ある程度の金額に限定し、リスクが高くても積極的に運用収益を狙う部分があっても良いという意見もあります。

### 利益創出を代理人に委託する

積立金の管理・運用は、年金資金管理運用独立行政法人（GPIF）という独立行政法人によって行われています。国民が依頼人（プリンシパル）で、代理人（エージェント）であるGPIFに積立金の管理・運用を委託していることになります。一般的にこのような場合、いわゆるプリンシパル・エージェント問題が発生する恐れがあります。依頼人は代理人の行動を全て監視することはできませんし、証券投資のように結果が市場環境に大きく左右される場合には、代理人の能力や努力水準を確認することが難しくなります。場合によっては、依頼人の利益にならない行動を代理人がとるかもしれないのです。

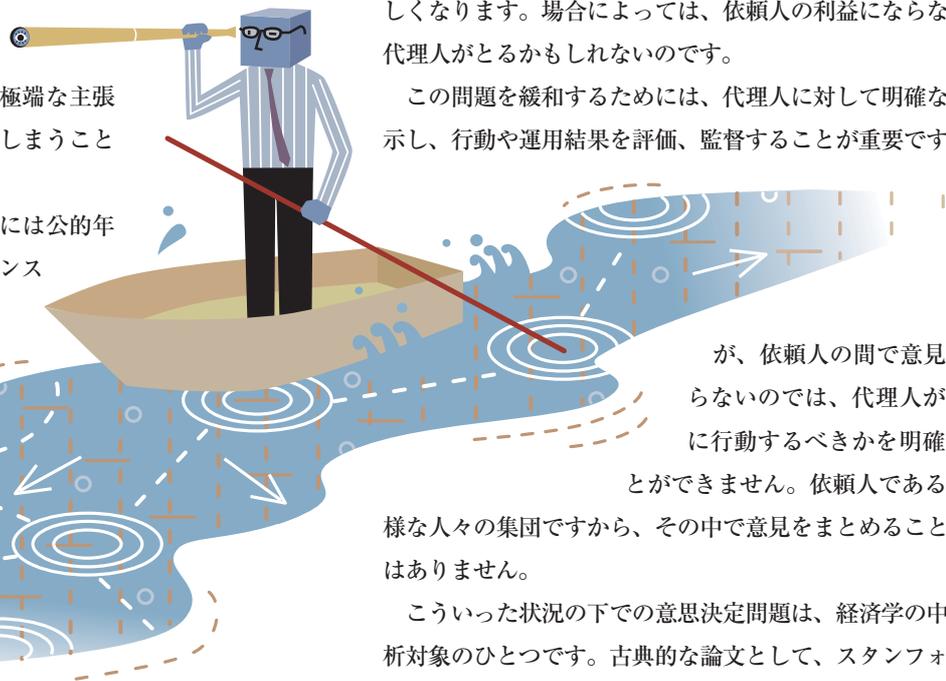
この問題を緩和するためには、代理人に対して明確な目標を提示し、行動や運用結果を評価、監督することが重要です。ところ

が、依頼人の間で意見がまとまらないのでは、代理人がどのように行動するべきかを明確に示すことができません。依頼人である国民は多様な人々の集団ですから、その中で意見をまとめることは簡単ではありません。

こういった状況の下での意思決定問題は、経済学の中心的な分析対象のひとつです。古典的な論文として、スタンフォード大学のRobert Wilson教授による1968年のシンジケート理論についての論文があります。Wilson教授は、個人の集団が、集団全体として不確実性下の意思決定問題に直面し、実現した利得を構成員の間で配分するという状況を考え、そのような集団のことをシンジケートと呼び、その性質について分析を行いました。

### リスクの負担とリターンの配分

積立金運用の問題にシンジケート理論を応用して考えてみると、大きく二つの問題を同時に考えなければならないことがわか



ります。ひとつは株式と債券の投資比率といった証券ポートフォリオを決めることです。もう一つの問題は、ポートフォリオ運用の結果として実現した資産をどのように配分するかという問題です。前者について世間では安全第一とか、もっと積極運用すべきだとか、いろいろと議論しているわけです。後者の問題はほとんど議論されていません。積立金は年3.2%や4.1%といった利回りで運用されてゆくことになっていますが、株式や債券といった証券に投資をすればその価値額は変動しますから、常識的に考えれば、予定した利回りを毎年確実に実現してゆくことはできないことがわかります。短期的な変動に一喜一憂する必要はありませんが、収益や損失を把握し、年金財政への影響を常に確認しておくことは大切です。しかし、年金財政への影響を確認するということは、発生した収益や損失を誰に配分するのかを決めるという問題に他なりません。大きな運用損失が発生した場合、現役勤労世代、給付受給世代、さらには子供達の世代の間で、どのように損失を負担してゆくのか。逆に、運用結果が良かったときに、どの世代がその恩恵を受けるのか。運用結果がどのように各世代に影響を与えるのかは明確にされていないのです。

Wilson教授は実現した資産総額をパレート効率的な配分ルールを用いることを前提に、興味深い分析を行っています。ここで詳細に立ち入ることはできませんが、中でも特に興味深いのはシンジケートの目標（目的関数）についての分析です。パレート最適な配分ルールを用いる場合、たとえば若年層から高齢層へ、富裕層から貧困層へというように、シンジケートの構成員に重み付けをし、優先度が決められ、そこから配分比率が決められます。シンジケート理論によると、ポートフォリオの意思決定と、配分を定めるときの各個人の優先度の決定は独立に行わないと、最大化すべき目的関数を設定できません。簡単にいえば、配分ルールをあらかじめ決めておかないと、ポートフォリオを決めるための目的関数が定義できないのです。委託者の目的がはっきりしていないのでは、代理人にどのように行動して欲しいのかを伝えることができません。

## 異質性が意思決定を困難にしているが…

また、標準的なポートフォリオ理論を用いるためには、将来予測（確率分布）と、リスクに対する態度（危険回避度を定める効用関数）が定義されている必要があります。ところが、依頼人である国民の間で、予想やリスクに対する態度が異なる場合、シンジケート全体としての確率分布と効用関数の存在は必ずしも保証

されません。一般論としては、もうすぐ給付を受け始める世代の人々は、若年層よりリスクを嫌うのではないのでしょうか。将来の経済、市場動向についての予想も人々によって大きく異なるでしょう。こういった場合、シンジケートの目的関数を将来予測（確率分布）とリスク回避度（効用関数）に分離して表すことは一般にはできません。これでは、いくら議論をしたところで、ポートフォリオを決めることはできません。このように、シンジケート理論の枠組みで考えた場合、シンジケートの構成員の間の異質性によって、全体としての意思決定ができなくなってしまう可能性があるのです。

構成員の異質性はこれまでも常に存在していました。問題は異質性の程度でしょう。多くの社会問題について、現在の日本で特に意思決定が難しくなっているというのは、国民の間の異質性がより深刻になっているためでしょう。公的年金の問題では、少子高齢化による世代間の格差、また所得や地域の格差が大きな問題です。日本経済と資本市場の先行きについても、高度成長期のように成長期待を共有することはできません。これらの異質性によって、全体としての意思決定の難しさが深刻化しているように思われます。

現在も積立金運用において基本ポートフォリオと呼ばれるポートフォリオが作られています。これは運用結果と年金財政の関係を完全に無視しているために決めることができているのです。長期的には予定された運用利回りが得られるはずだという理屈を根拠に、運用結果と公的年金の年金財政の関係を検討することはなく、各世代にどのように収益や損失が配分されるのかも明らかにされていません。

異質性の程度が大きくなった場合、決めることがより難しくなるのは事実です。ボトムアップの意思決定は機能しにくいでしょう。優秀なリーダーによってトップダウンの意思決定が行われることを待つしかないのかもしれませんが。積立金運用によるリスクとリターンをどのように各国民が負担してゆくのかは難しい問題ですが、この問題に気がつかないふりをしても制度を維持することはできません。真っ向からこの問題に取り組むという勇気を持ったリーダーの出現が求められています。

決める  
世界を解く

【ファイナンス】



国際企業戦略研究科  
准教授  
本多俊毅  
Toshiki Honda

# 日本サッカーを語る事＝日本の未来を語る事!?

## 決定的な一瞬

決める——スポーツではこの言葉がいたるところで使われているが、この言葉で多くの人が真っ先に連想するのは、「ゴールを決める」「スパイクを決める」「三回転ジャンプを決める」といった得点場面や勝負を決定づけるシーンではないだろうか。

それは、チームメイトや観客から「今だ!」「決めろ!」といった喚声上がる瞬間。イングランドのサッカーなら、観客が一斉に立ち上がる(留学中に50試合ほど観戦したが、この動作は今でもしっかりと体に染みついている)、その決定的な一瞬で、得点が入ればチームもサポーターも喜びを爆発させ、失敗すれば溜息がスタジアムを包む。

サッカーは得点がなかなか入らないスポーツなので、それだけ得点シーンへの集中度と爆発度が高くなるのだろう。しかもそれが逆転となる1点、さらには優勝や世界大会への出場を決定づける1点であったならば、つまりそのシーンのもつ重要度が高ければ高いほど爆発度は高まる。そしてこうした状況での得点は、サポーターや選手たちにとって生涯忘れることのない劇的なシーンとして記憶されていくことになる。日本のサッカー・ワールドカップ初出場を決めた岡野のゴール、今年のWBCでのイチローのヒット等がそれだ。

## プレッシャーとの闘い

だがそうであればあるほど、このシーンは選手にとってとてつもないプレッシャーとなる。先にあげた日本のサッカー・ワールドカップ初出場を決めた場面について岡野は、「これはずしたら日本に帰れないと思った」と言っていたが、「失敗したらどうしよう」というプレッシャーは、その深刻さのレベルはちがっても、体育の授業や仲間との遊びのなかでさえ生じるので、みなさんも多かれ少なかれ経験があると思う。

さて、この決定的な場面でのプレッシャーだが、それをほねのけたり、うまく対処するためにいろんな工夫がなされている。オリンピック選手が「オリンピックを楽しみたい」と語るようになったのは1980年代半ばからだ、それは「日の丸を背負う」こと等からくる、想像を絶するプレッシャーから自らを解放するためのひとつの工夫でもあった。

プレッシャーを楽しむのがスポーツの醍醐味だ——慶應義塾高校野球部の上田誠監督は、ストレートに「Pressureを楽しむ(胃

液と友達になる)」と表現し、「チャンスの時は70%で振れ。ピンチの時は70%で投げろ」といった具体的な指示も出している(「慶應義塾が優勝する25の方法」より)。さらに最近ではメンタルトレーニングも活用されるようになってきた。

## トライしない日本人

しかし、日本のスポーツ選手の場合には、こうした工夫だけではどうにも解決しそうにない、根深い問題があるという。

たとえば、サッカーの東京ヴェルディー・ジュニアユース総監督松田岳夫は、「ボールを持ったときに、取られちゃいけないって思っちゃう子が多い。敵を前にして〈コイツを抜いてやろう〉という気持ちよりも、失敗という結果を恐れる気持ちの方が強い。……失敗への恐怖や迷惑をかけるのを避けようとする気持ち、つまり協調性といった日本の社会で身につけてしまう要素は、個々の指導者の力だけでは、いかんともし難い」と語っている。

日本人選手のネガティブで消極的な姿勢という問題は、日本代表というトップクラスの選手においても指摘されている。サッカー日本代表の前監督イビチャ・オシムは、代表監督時代に『日本人よ!』という本を書いているが、その中で次のように言っている。

「日本人は伝統的に責任を他人へ投げてしまう。工場ならそれでも機能するかもしれない。すべての責任を取締役に押し付けられればいいんだからね。けれども、サッカーではそれは通らない。サッカーでは上司も労働者も全員が一緒にいるわけだから」。

「日本はプレーにおける責任感に欠けている……これは私に限ったことではなく、日本サッカーに詳しい誰もが語っていることである。……サッカーでは全員で問題を解決しなければならない。しかし、誰のサポートも受けられない状況下で、一人で責任を背負って解決しなければならない場面もある。そこでミスするかしないかは重要ではない。日本の教育の問題は、長年にわたって罰を与えてきたシステムにあると、私は考えている。どんな小さなミスでも罰せられると考え始めた瞬間に、人は罰せられないように何もトライしなくなる。しかし、サッカーはトライとミスなしで進歩することはできないのだ」。

トライしない日本人。その萎縮した姿の背後にオシムは、上記の教育システムとともに「年上と年下、監督と選手の間」という具合に、見えない階級＝ヒエラルヒーが存在していることをあげている。それらが、プレーの萎縮のみならず、「自分の頭で考え、自分で解決する能力」や「言語によるコミュニケーション」の欠如というサッカーにとって致命的な問題を引き起こしてい

る、つまり日本人を“萎縮したロボット”にしてしまっているというのがオシムの見解だ。

## サッカーは人間的な成熟を求める！

2002年日韓ワールドカップの時の日本代表監督フィリップ・トルシエ。彼も、著書『トルシエ革命』のなかで同様の意見を述べている。

「日本人はテーマと目標を与えられれば、それをなし遂げるために素晴らしい集中力を発揮する。たとえその目標が自分の考えとは相反するものであっても、プロとしてきっちりと仕事をする。組織のために自己を犠牲にする精神は、必ずしも日本独特のものではないかもしれないが、それが日本社会の大きな力になっているのは間違いない。ただその特性が、日本人から自らの責任において判断する力を奪っている。赤信号の例などは、まさにその典型であろう。車が来ないことがわかっている、多くの日本人は決して横断しようとはしない。しかし信号を守るのは身の安全を守るためであって、規則を守ることそれ自体が目的ではないはずだ。秩序・規範は社会が定めるものであるが、自己の価値判断とのせめぎあいには常に存在する。それが市民として社会を生きるということなのだから」。

トルシエは言う。サッカーでは「自ら判断し責任を引き受ける人間的な成熟が求められる」。

## 原因は日本社会そのもの!?

選手が自らの責任において判断する力——その欠如を松田もオシムもトルシエも嘆いているのであり、その原因が日本社会のあり方そのものの中にあると見ているのだ。こうした意見が噴出し始めたのは、1998年のワールドカップ・フランス大会で、初出場の日本が期待むなしく3戦全敗した時だった。「岡田ジャパンの敗北は日本社会の敗北だ!」「『組織の敗北』から始める2002対策! 3戦全敗の果てに見えたものは『個人』の差だけではない!」「W杯日本代表にみる『ジャパニーズ・ウェイ』の限界」といった主張が『週刊現代』『スコラ』『プレジデント』といった雑誌に登場し、こうしたなかでNHK教育テレビの『未来潮流』も「ワールドカップにみた日本型システムの壁」

(1998年10月17日放映)という特集を組んだ。

それらは、感覚的なレベルでサッカーと社会とを短絡的に結びつけて、「サッカーを強くするには日本社会そのものが変わっていかねばならない」とラディカルに主張するものであるが、それが肯定的に受け入れられていったのは、バブル経済が崩壊し、かつての集団主義や根性主義では日本経済の再生は不可能となり、従来の枠を越えた自由で創造的な発想などが求められる——そんな時代背景と見事に符合していたからであろう。

## 日本の再建とサッカー

ジーコ監督が率いた2006年のワールドカップ・ドイツ大会。日本の初戦の2日前、日本サッカー協会の川淵三郎会長(当時)は、ジーコ・ジャパンの選手たちに向かって、



「日本の社会の在り方を変えるきっかけになればいい。『ドイツW杯をきっかけに、スポーツの認識が変わった』と言われるようにやってほしい」と激励したが、そこにはサッカーこそが時代の先端を走る、日本社会の変革者であるという自負が示されていた。

選手が自らの責任において判断する力——その養成は、日本のサッカー界の課題であるとともに、バブル経済崩壊後の日本を立て直していくという切実な課題ともリンクしており、それによって力強さを増している。ぼくはそんな見方をしている。

# 決める

世界を解く

【スポーツ社会学】



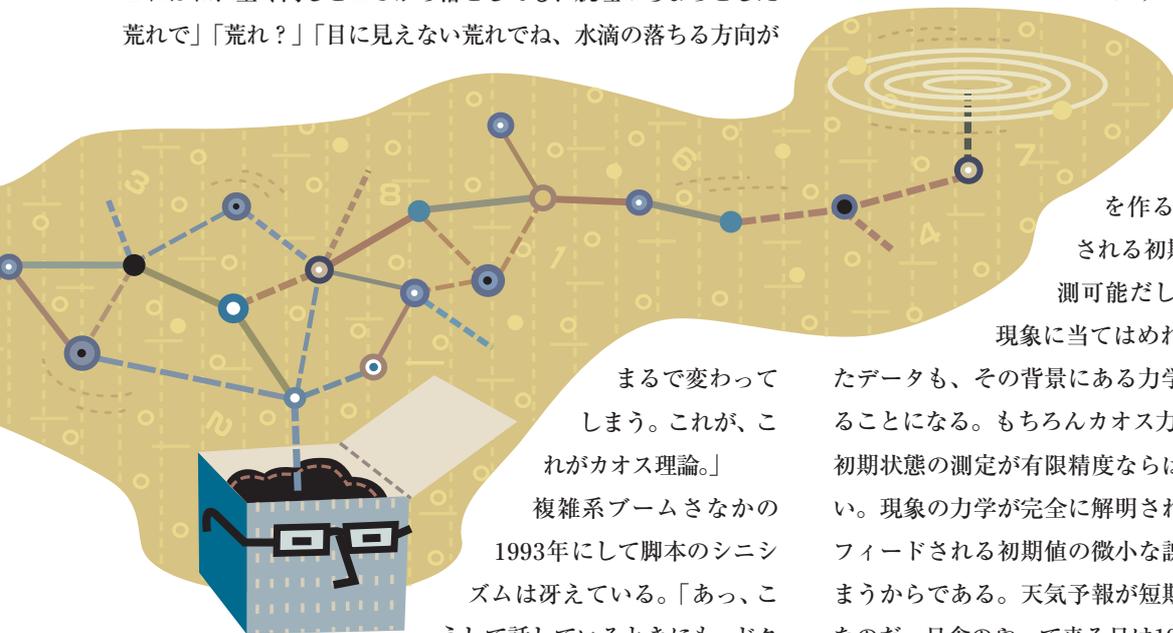
社会学研究科教授  
坂上康博  
Yasuhiro Sakaue

# 決定論的世界の予測不能性に耐える

## テーマパークの数学者

物理学者ならビー玉を手にとって、ボウルの内へりに押し当てながらいだろう。私がこの手を放しても、玉がどこに行くか目をつむってたって分かる。ボウルの底で止まるから。だけどこうしてボウルを伏せて、頂上に玉を置くとどこに落ちるか、どんなに目をこらしても分からない。

ところがカオス学者だったら、レザーパンツに身を固め、ジュラシックパークに行き合わせた古植物学者のやわらかな手を取って。「さあ、手の甲に氷水を一滴落としてみるよ。スーッ。腕のこちら側に落ちたね。じゃあ、同じところからもう一度試してみよう。どちら側に落ちるかな」「同じ方?」「スーッ。向こう側。ね、これはね、全く同じところから落としても、肌理のちょっとした荒れで」「荒れ?」「目に見えない荒れでね、水滴の落ちる方向が



まるで変わってしまう。これが、これがカオス理論。」

複雑系ブームさなかの1993年にして脚本のシニシズムは冴えている。「あっ、こうして話しているときにも、ドク

ター・グラントは動いている車両のドアを開けて外に飛び出してしまう！これぞまさにカオス理論だね、おっと、すると君まで同じように出て行ってしまふ、そして、そして私ひとり残されて、自分に向かってしゃべっている、これが、(人差し指を立てて)これがカオス理論。」実際、確固たる実証科学的成果を収める前に、森羅万象を解き明かすかのように宣伝されたカオス理論・複雑系科学は、聴衆を失った誇大妄想男の独り言とどう違うのか。

## 荒野の決定論

今日の状態  $X$  から明日の状態  $X'$  への変換が力学である。胎児

が骨盤にはまりこんでいくように、力学は単調収束的でありうる。連れ立って旅に出た瓜二つの男がかたや王様かたや乞食になる説話のように、力学は単調発散的でありうる。バネのように減衰振動もする。発散振動もするし、周期解を持つこともある。もしもボウルの底がでこぼこ (rugged landscape) だったら、ビー玉は荒野を走るラリー車のように、底のあらゆる点を経巡り続けるかもしれない。初期状態のわずかな違いが雪だるま式に増幅されながら (初期値鋭敏性)、無限遠に発散してしまうこともなく、周期的な解も持たない軌跡がカオスとよばれる。計算機の発達は、単純な力学系にそのような複雑な軌跡を生み出す広大な沃野のあることを明らかにした。

実証科学の方法論の上で、カオス力学は決定論的描像と確率論的描像の橋渡しをしたといわれる。カオス力学は決定論的シ

ステムでありながら確率的に見える

データを作り出すことができる。

実際、コンピュータの

擬似乱数はそのように作ら

れる。したがって、擬似乱数

を作る力学方程式とそれにフィード

される初期値が分かれば、擬似乱数は予

測可能だし再現可能である。これを自然

現象に当てはめれば、従来ノイズとして扱われ

たデータも、その背景にある力学が発見されれば予測可能になることになる。もちろんカオス力学は初期値鋭敏性をもつから、

初期状態の測定が有限精度ならば予測は短期的にしか当たらない。現象の力学が完全に解明されたとしても、予測システムに

フィードされる初期値の微小な誤差が雪だるま式に増幅してしまうからである。天気予報が短期しか当たらないのはそのため

なのだ。日食のやって来る日は100年先まで分かっているのに台風の進路が明日をも知れないのは、気象学者にニュートンの天才がないためであるよりかは、ニュートンの扱っていた現象が

予測を可能にするような種類の力学だったためである。

## 動学の生成する静的な構造

「静的構造+ノイズ」からなるモデルに対置されたとき、複雑系力学が明らかにするのはノイズの来歴だけではなく、静的構造の背後にある生成プロセスである。非線形力学は擬似ランダムなデータを生成することができるが、一方で長期的に安定的な法則性を生み出すこともできる。法則性とは時間・空間的な

構造・パターンのことである。例えば、多くのカオス力学は特定の領域内の値だけを取り、完全な周期解ではないが擬似周期的な軌跡を持つ。これは例えば生物の概日リズムの解明に应用されている。多くの生物が恒常的環境でも24時間周期の生理現象を保持するが、3種類のタンパク質の化学反応力学でこれを再現することができる。また多くの力学が時間・空間的な自己相似性（フラクタル性）を生成する。これは例えば、乱流が大きな渦の中に無数の小さな渦を次々と生成していく現象の理解につながる。さらに無数の個体が相互作用する複雑適応系では、個体行動の広範囲な相関が観察される。例えば、温度が沸点未満から以上へ小さく変化するだけで水の分子は一斉に振る舞いを変えて液体から気体へ相転移するし、道路上の車密度の小さな増加が大渋滞を引き起こす。そして系の構成要素が分子であれ自動車であれ、マクロの相の転換点ではミクロの個体の相関構造に一般的な規則性があることが知られている。

静的な構造として観察される法則性をその背景にある動学にさかのぼって理解することには、単なる知的探求以上のどのような意義があるだろう。一つの答えは、それらの現象に対する人間の操作可能性を増すことであろう。例えば、近頃よく行われている高速道路での様々な実験、トンネル入口の照明を明るくすると微妙な上り道では看板で加速を促すとかは、渋滞流のような複雑な現象もある程度制御可能であることを示すだろう。もう一つの答えは、それら複雑現象に対して人間が持つ描像の変更を促すことである。これについて最もロマンティックに語られるのは、生命という主題である。生命とはある程度長期的に安定的な構造をもつ有機体で、その安定性は無数の化学反応の相互作用力学によって支えられている。いわく、生命は本質的に動的な現象で、静的な構造を描写しても生命は捉えられない。いわく、生命は本質的に全体的存在で、器官や機能に要素還元されたものの総和としては捉えられない。云々。

## 進化の描像

少し目を転じて、生命の歴史である進化を考えよう。時空間上の種の配列を統合的に理解するのが進化論である。ある種が絶滅したのはそれが当時の生態系に不適応だったため子孫を残せなかったからだと考える。現在の種が生き残っているには、それ相応の適応合理性があったためだと考える点で、進化論はしばしば目的論的に理解される。ママが算数できないのはパパの気をひくためにそう進化したのよ、とトンデ

モがお茶の間の消費に供されたりもする。

進化とは種が種の総体である生態系と相互作用して、環境に適応した種を残し不適応な種を淘汰する複雑適応力学系である。ジャガーの脚力からアリの隊列まで、生物の驚異のすべては突然変異と淘汰圧のすばらしい創造性を証明している。しかし複雑力学の初期値鋭敏性に見慣れると、爪の先からママの算数まで淘汰の死神の合理性が貫徹しているとは思えなくなってくる。一見したところ優越するものが必ずしも生き残るわけではない事例として、VHS対ベータのビデオ規格争いがあげられる。実際、偶発的に発見される新技術が財の生態系と相互作用しながら盛衰するイノベーション史は進化系そのものである。技術的に優越したわけではなかったVHSが勝ったのはなぜか。一説によれば、レンタルビデオ業界がフランチャイズ化されたとき、VHSはすでに録画時間が長くビデオ一本でハリウッド映画を収めることができた。一方ベータは時期的にわずかに遅れた。フランチャイズは店頭の棚を節約できるVHSを選択してこれが規格争いの転換点となったという。

ビデオ史の真偽はともかく、複雑適応系ではささいな状況の布置の違いによって未来の軌跡が大きく変わっていく。複雑適応系の描像は、現在の静的構造の中に目的論的に見いだされた合理性ではなく、ただ生成の理合である。静的な構造を動的な生成から捉え直す批判は科学に常に内在する。進化論と並んで複雑現象を対象としてかつしばしば目的論的に理解される科学である経済学において、市場競争均衡では生産性の低い企業が淘汰され消費者に望まれる財が生き延びる。その描像の有用性は大学4年間の勉学に値する。しかし競争均衡の静的な構造を背後から支えているのは別の動学である。個別資本がrugged landscapeで角逐する複雑適応力学が、宿命的にハッピーエンドに帰するというなら、それは経済学を学び損なっている。逆に宿命的に破滅に帰すると主張する「資本論」は、市場取引の動学から析出される貨幣Mとその自己増殖力学M-C-M'から説き起こす。託宣の是非はともかく、その立論は静的構造の目的論的解釈を拒絶することから始まる。

決める  
世界を解く

【経済学】



イノベーション研究センター  
准教授  
楡井 誠  
Makoto Nirei

# Captains

一橋大学創世記。

そこには、新しい価値を創らんとする力があつた。建設者としての誇りと意志があつた。

「Captains」それは近代日本の発展に多大なる功績を残した人々のストーリーである。

学問、国、家業、大学運営……有事のたびに求められた人格。

「Captains」第2回では、三浦新七博士の足跡を追ってみた。

第2回

# 三浦新七



宮本三郎/画

# 稀有な人格・乞われた見識 応え続けた人生70年

「学者としての偉大さは商大ピカイチであるばかりか、文明史においては日本随一といってもいい。商大の学問の全盛時代は福田、左右田の両博士とともに三浦博士があってこそ作られたものだ。それは昇格直前の大正時代の初めから震災直後までの約十年間、福田博士が慶應から商大に帰り、三浦、左右田両博士が留学から帰朝してから、左右田博士が亡くなり、三浦博士が帰郷し、福田博士が晩年の衰えを見せるに至ったまでの間だ」（高田忠二郎『日本評論』第10巻第11号）

「学園の伝統というが、三浦先生は疑いもなくその建設者の一人であられた。一橋70年の歴史は、その少なからざる部分が先生によって作られ、もしくは方向づけられたものである。少なくとも、その学園精神については、そういえる」（東京商科大学教授・上田辰之助『一橋新聞』第390号）

三浦新七（1877～1947年）が一橋大学の黄金時代を築いた学者の一人であることは、紛れもない事実です。しかし、その経歴を見ると、東京商科大学教授、両羽銀行（現山形銀行）頭取、貴族院議員（1932年～）、東京商科大学学長（1935年～）、日本銀行顧問（1939年～）、帝国学士院会員（1942年～）と、単なる学者の域を超えた多彩な活躍ぶりがよくわかります。実務家としても一流の成果を残しているのです。そこには、「用之則行、舎之則蔵」（用いられれば進んで正しいと思う道を実践し、用いられなければ世の中から隠れる）を追求した三浦新七の人生があります。



ドイツ留学時代、ライプチヒにて。  
写真：『三浦家の系譜』  
（1977年 西村直次／著 三浦彌太郎／発行）からの転載  
一橋大学附属図書館所蔵

## ドイツでカール・ランプレヒトに師事、 歴史学を修業する

三浦新七は、1877年山形市に生まれました。1901年高等商業学校専攻部銀行科を卒業するまでに銀行論についてのいくつもの論文を発表しています。卒業とともに母校の教職に就き、1903年、商学研究のためドイツ留学をしています。主にライプチヒ大学にあってカール・ランプレヒト（1856～1915年）のもとで文化史研究の真髄を追究したのです。

増田四郎（一橋大学学長1964～1969年・歴史学）によると、三浦新七は講義の最初に、自分の学問経歴を話して自分の歴史に対する態度を明らかにしたといいます（『中央公論』第961号）。商業政策を勉強するためにドイツに留学したこと、学問のための学問などは、当時も今も全く考えていないこと——などです。

三浦の高弟・村松恒一郎（一橋大学教授）は、三浦新七の文明史家としての生涯は留学とともに始まったとし、三浦自身

が留学前になした金融経済学的研究と著書を意識的に抹殺しようとしていたと指摘しています（『三浦新七博士生誕120年没後50年記念冊子』）。ちなみに、ドイツ留学前の業績について、同志社大学商学部の光澤滋朗教授は、「（1）「過程」としての商業概念の提示、（2）総括的上位概念としての商業学の提示、（3）商業学論の創始」を挙げています（マーケティング史研究会編『マーケティング学説史—日本編—』／同文館出版刊）。三浦を科学的商業学の開拓者として評価しているのです。

では、なぜ商業政策の勉強を目的としながら、留学先で文化史の研究をすることになったのでしょうか。高田忠二郎は、グルントリッヒ（基本的）なものを掘り下げていくうちに、歴史学に興味を持ってライプチヒ大学に腰を落ち着けてしまったと推測しています。歴史学者のカール・ランプレヒトと心理学者のウイヘルム・ヴェントとの出会いが大きかったのです。ヴェントは、実験心理学と民族心理学の設計者で、哲学の一つの大きな体系をつくりあげた大家であり、ランプレヒトはヴェントの影響を受けて精神生活の発展段階を文化における表れ方に求めています。三浦が師事したランプレヒ



上：ランプレヒト教授ゼミ。前列中央がランプレヒト教授、その後ろが三浦新七。

下：1907年ベルリンにおける山形中学同窓生。左端が三浦新七。

写真：2点共に『三浦家の系譜』（1977年 西村直次／著 三浦彌太郎／発行）からの転載  
一橋大学附属図書館所蔵



トは、『ドイツ史』19巻を著した碩学です。そのランプレヒト教授のもとで、約9年間修業。その間には、ミュンヘンで心理学をテオドール・リップスに、ベルリンでグスタフ・フォン・シュモラーやアドルフ・ワーグナーの経済学を学び、「生の哲学」で有名なゲオルク・ジンメルの講義を聴いています。

「個々のものへのよろこびは、自分には研究の途上においてのよろこびではあっても、研究の出発点ではない。したがって個々のものを研究する時にも、ティピカルとでもいおうか、つまり全体にひっかけてよろこぶ、ないし見るのである」と後日、三浦が語っているのを増田四郎は聞いています。心理学や経済学、文化史などあらゆるものに示す関心の広さは、全体を意識しながら個々を見るという研究態度がその根底にあるからこそといえます。

## ライプチヒ時代から 「先生の先生」の働き

上田貞次郎（東京商科大学学長1936～1940年）は、『一橋新聞』第263号で、「ライプチヒに最も長く居られたので多くの留学生の仲間では三浦さんをライプチヒ村長と呼んでいました。ドイツに留学するものの多くはこの村長を訪ねて忠告を

受けたのです。ゆえに三浦さんには学者の先生、先生の先生としての働きがあるので、それはライプチヒ以来今日に及んでいます。その意味において日本学界の指導者であります」と記しています。

また、山形大学人文学部の國方敬司教授は、「三浦博士の学問は、研究業績としてだけ意味があったのではない。学問を通してその人の考え方やものの見方、いわば人格を徹底して変容せしめたこと、そこに意義があった。だからこそ、上原専祿先生や増田四郎先生といった当代一流の思想家・歴史家が三浦博士の影響のもとで育ったのである。それどころか、歴史学とは距離のある別の分野で優れた業績を残された高橋泰蔵先生といった諸先生が、三浦博士に影響され、また生涯慕い続けたのであろう」（一橋大学附属図書館報『鐘』第46号）と記しています。

さらに、村松恒一郎は、「私の見る所丈でいえば先生のお仕事は完成していないこと、又それは恐らく本質的に完成し得られぬ約束を含み、それ故にこそ猶更自分には尊く思えるのである。そしてその不断に一貫してその学問的生涯を或いは完成し得られぬような約束を含む唯一の大きな仕事に捧げ尽くされた先生の態度の中にこそ、直接の先生の弟子達のみでなく、本学に居るあらゆる先生の後進者が先生から受けた直接間接の幅広い指導的感化の源があると私には思われる」（『三浦新七博士生誕120年没後50年記念冊子』）と記しています。

「先生の先生」としての存在感は、早くもライプチヒ時代から示されており、また一貫して若い学生の教育に情熱を持ってあたるなど、70年の生涯は「研究者」「教育者」としての芯が通っています。

## 帰国後10年目にして 初の「文明史」の論文を発表

1912年にドイツより帰国。東京高等商業学校で「商業史」「経済史」の講義を行うとともに、図書館主幹として附属図書館の充実に努めました。1920年に東京高等商業学校が昇格して東京商科大学となります。すると、異色の講義科目「文明



東京高商時代、佐野善作校長を囲んで。左より三浦新七、佐野善作、堀光亀、上田貞次郎。  
写真：『三浦家の系譜』（1977年 西村直次／著 三浦彌太郎／発行）からの転載  
一橋大学附属図書館所蔵

史」を創設し、1921年に文明史最初の論文である「宗教を通じて見たる古代猶太の国民性」を発表。ヨーロッパ文化を構成する本質的な要素として、ユダヤ、ギリシア、ローマの古代世界を代表的3民族と考え、それぞれの国民性を、宗教、芸術、思想、法政などの各方面に表れた団体意識の特殊性を統一的に掴み取ることで浮き彫りにしようとした。

歴史的分解の手段としては、国民性の種々なタイプを想定。各国が各時代に共通に示すメロディーを国民性と名づけ、これはそれぞれの型をなしているとしています。国民性のタイプとして三浦は実践的＝プラクティッシュ（個別的＝ブルラリスティッシュ）、理論的＝テオレティッシュ（普遍的＝モニスチッシュ）の対立及びこれとクロスする主観的（ズブエクヴィスチッシュ）、客観的（オブエスヴィスチッシュ）の対立を認め、これによって古代諸国民を次のように配列。こうした前提のもと、西洋文化を分析していくのです。

	実践的	理論的
主観的	ローマ	ギリシア
客観的	ユダヤ エジプト	ペルシア インド

## 兼松講堂の美しさを 学問研究でも表現できるという自信

三浦は学問を美しい体系と考えていたようです。

「一橋大学図書館の入口から、同じ構内にある兼松講堂の均整の取れた美しい姿をしばしながめていた博士は、『美しい、よくできている』と感心したあと、しばらくして私たち若いものをふりかえり、『しかしあれくらいものは学問研究でもやれるさ』といわれたことを思い出す。つまり博士にとっては、学問研究は偉大にして独創的な体系樹立に対するたえざる精進であり、知識による世界征服の企てであり、本質的なものすべてを吸収して世界史の絵を描くことであつたのである」（増田四郎『中央公論』第961号）

さらに三浦は、予科の講義「修身」を自ら担当し、歴史に学び、歴史に生きる姿勢を講じて、聴く者に深い感銘を与えたといいます。自分の歴史学に実践的な意義を認めていた何よりの証拠といえるでしょう。

「日華事変がだいぶ進行していたころ、『自分たちの仕事が間に合わなかった』と嘆かれたのを私は直接に聞いたし、そのころ私宛の私信にも、戦争中にもかかわらず生活様式にも変化がなく、幸福な状態だが、これでは『ほんとうの体験とならず、老人も戦地に来て見たい心持ちも致居り』と書かれており、学者としていわゆる象牙の塔におればよいという考えではなかった」（朝日新聞社常務取締役・論説主幹・笠信太

郎『わが師』／東京出版刊）という証言もあります。学問のための学問では飽き足らなかったのです。

## 乞われて両羽銀行頭取に就任。 不良債権処理に奔走

大正末期から昭和の初めのころは、第一次世界大戦後の反動不況により、農村は疲弊していました。しかも、政府が財政の緊縮と産業合理化によるコスト低下を目的とするデフレ政策をとったことから、金融は逼迫し企業倒産が続出しました。1927年3月には東京で銀行取り付け騒ぎが起こり台湾銀行が休業し、政府はモラトリアムを断行せざるを得ませんでした。その後は、弱小銀行の合併が進められ、山形の両羽銀行（現山形銀行）でも合併話が進んでいました。しかも、回収不能な融資が多額にのぼり不良債権の整理が焦眉の急でした。しがらみのある旧経営陣ではなく有能な新経営者が必要だということで、白羽の矢が立ったのが元頭取三浦権四郎の嗣子である三浦新七でした。こうして1927年に大学を辞して、家業に就くことになりました。同時に東京商科大学講師に囑託されて、「文明史」の講義を続けることになったのです。

1928年両羽銀行の監査役に就任。詳細な再建案を立てて、4分の1減資という思い切った措置を講じました。翌年に頭取に就任。天童、東根、楯岡等の銀行を吸収合併し、山形県の中核金融機関として確固たる位置を占めるに至りました。1932年には貴族院議員に勅任され、国政に参与しました。さらに、「山形郷土研究会」を創設して、科学的な地方史研究の発展に資したのです。実業人として、また教育者や政治家として活躍していたのです。



酒田・本楯の出羽欄址保存会関係者。中央が三浦新七。  
写真：『三浦家の系譜』（1977年 西村直次／著 三浦彌太郎／発行）からの転載  
一橋大学附属図書館所蔵

## 「白票事件」を収束すべく 教授会満場一致で学長に迎えらる

1935年、東京商科大学は、「白票事件」で揺れていました。杉村廣藏助教授の博士論文が教授会の白票多数によりパスできなかったことに端を発して、これまでの不満が噴き出して助教

授、助手たちが一丸となって学問向上運動を起こしたのです。

その混乱の収束のために三浦新七待望論が起きました。三浦は常に東京商大の動向に関心を持っており、助教授たちの運動に同情を寄せていましたから、「ただの火消し役だよ」と言って上京。教授会の満場一致をもって学長に推されたのです。このころには両羽銀行再建の見通しが立っていたことから、三浦は頭取を辞して学長に就任しました。

なぜ、この時期に三浦新七が学長になったのでしょうか。高田忠二郎はその理由に、「(1) 学者としての偉大さは商大ピカイチ、(2) 象牙の塔に籠もるひ弱な学者ではなく実務的な、政治的な腕と力を持っている、(3) 高商専科出身の古株で貫禄十分、(4) 助教授、学生たちの信頼を得ている」(『三浦新七博士—その人と軌跡』) ことなどを挙げています。

しかし、こうして就任した学長を、早くも翌年には辞しています。学生たちとの読書会の席で、あまりにも短い学長任期についてメンバーの一人から質問ができました。

「この不躰とも思われる質問に対して、先生は真っ正面から『論語』の一節を引用して教えるように答えられたのを記憶している。それは『論語』の述而篇にみえる弟子顔淵との対話として有名な一節『用之則行、舍之則蔵』という言葉であった」(東亜火災海上再保険株式会社取締役・三嶽恭二『如水学会報』第560号)

「用之則行、舍之則蔵」(之を用うれば則ち行い、之を舍つれば則ち蔵る)こそ、まさに三浦の行動原理といえます。その辺りを高橋泰蔵はこう記しています。

「先生が自らの出処を決められるに当たって、いま自分を最も必要としているのは、どのようなことか、という観点から判断されたと推察される。1927年の金融恐慌のとき、乞われて母校の教授を辞され、もともとご家業であった両羽銀行(現山形銀行)の経営に、頭取として当たられたこと——もともと、先生は、その後も70歳で歿せられるまで、母校で講師として講義をつづけられ、終生、学者として生涯を送られたのであったが——また、母校に紛争が起こった際、これまた乞われて大学長として事態の収拾に当たられたこと、さらに戦時中、山形中学校で同級であった結城豊太郎氏が日本銀行総裁になられるに当たって、求められて総裁顧問——それは当時、公式の役職ではなかったが——の任に就かれたことなどを、あげたのであった。これらは何れも、自ら求められたものではなく、その時の周囲の状況、社会の事情からみ

て、自分を最も必要としていると判断されたことによるものと思われる事例である」(一橋大学名誉教授・経済学博士・高橋泰蔵『心の糧』第9巻第3号)

## 師を乗り越える姿勢と 学生に徹底的に付き合う姿勢

三浦新七は、「先生が偉いとお弟子は苦勞する」とよく言っていたようです。カール・ランプレヒト教授のもとでの勉強ぶりは大変なものでした。ランプレヒトの研究に立脚しながらランプレヒトを一步踏み越えようと努力を重ねたのです。三浦のゼミナールに学んだ笠信太郎によると、「先生が偉いとお弟子は苦勞するとは、先生を乗り越えて進もうとする弟子の努力を意味するもの」です、と記している(前出・『わが師』)。

一方、学生にとっては三浦を乗り越えるのに苦勞することになります。笠信太郎は、「私どもの前に立たれた三浦博士は、洋々と流れる大河のような感じであった。広く、そして深く、しかも大きな動きは静かであった。先生がえらいと弟子が苦勞する、と三浦博士が言ったのは、これはまたまるで違って、先生があまり高くて、弟子はとっつきようがないという始末であった」と同じ本に記しています。

三浦は、ゼミナールばかりでなく自宅でも夜更けまで学生を指導しています。上原専祿(東京商科大学学長1947~1949年)は、『一橋新聞』(第390号)に学生時代を振り返って、「本は読むものであって、読まれるものではない」ことを三浦に教わったと書いています。またゼミナールでの丁寧な指導に触れたあと、懇切を極めた本郷のお宅での『指導』に触れています。それはどんな些細な問題でも、「聞くものの立場に立ち、問う者の心になり切って、慎重にそして熱心に応答せられるのである」というものです。夜が更けて下宿に帰っても、「衣服になおも残っている葉巻の香りとともに、その法悦はさりやらぬのだった」とその喜びを記しています。

また、人との繋がりについても、次のように記しています。



本郷・大津旅館における三浦ゼミ。  
写真：『三浦家の系譜』(1977年 西村直次/著 三浦彌太郎/発行)からの転載 一橋大学附属図書館所蔵

「先生は縁あって一度関係のできた場合は、人とても物とても、万止むをえぬ場合の他は、終始つき合っ行って行こうという態度であられたと思う。そこで、神田神保町角の煙草屋で葉巻を買うことが決まると、その店がいつまでも『レガリア』を供給することになるし、赤門前の大津旅館を仮寓と定められると、戦災でそれが焼けてしまうまで他の住居を考えるということはせられぬし、ライブレヒト歴史学の洗礼をいったん受けられると生涯ライブレヒトを生かそうと努力されるし、商科大学に縁ができると終始一貫何とかしてこれを守り立てようと尽力されるという調子である」（『一橋新聞』第390号）

## 学問への傾倒イコール 人格への傾倒となる高い人格

中山伊知郎（一橋大学学長1949～1955年）は、「率直な話し方の中に、強烈な個性があった。別に文献をあげるのでもなく、他人の説を批評するのでもなく、いきなり一つの文明の中に飛び込んで本質的なものをつかみだすといういきかたであった。

一口に言って、三浦先生はものの見方、考え方を教えた先生であった。東西古今にわたる文明の歴史から、何をどのようにしてつかみ出すかの方法を、彫刻的な手法で教えた先生であった」（中山伊知郎『笠信太郎全集』月報No.2）と三浦の手法を評しています。

また、笠信太郎は、師である三浦新七について次のように語っています。

「学問が非凡だといえるほどの人は少なくはないが、学問を差引けばあとに多くが残らないというような人も、少なくはあるまい。それはただ学問があるといえる人のことで、学問がその人に浸透していて、その高い人格を作っているといった人ではない。博士の場合は後者だといふべきであって、学問とその人格とが別別でないといってもよからう。それは、外側からいうと、この師の学問に傾倒することが同時にその人格に傾倒することになるし、いわば、凡そ人生の問題の理論的な領野にわたって、つねにその人の見解を問わないではおられないということになる」のだ、と（前出・『わが師』）。

〈コーディネーター 経済学研究科教授 大月康弘〉



鎌倉の別荘で、  
三浦ゼミの学生と三浦新七夫妻。  
写真：『三浦家の系譜』  
（1977年 西村直次／著  
三浦彌太郎／発行）からの転載  
一橋大学附属図書館所蔵

### 【三浦新七年譜】 Shinshichi Miura (1877～1947年)

- 1877年（明治10年）山形県山形市に生まれる（6月12日）。
- 1901年（明治34年）高等商業学校専攻部を卒業、同校講師となる。
- 1903年（明治36年）文部省留学生としてドイツに赴き、  
ライプチヒ大学で歴史学者カール・ランプレヒトに師事、後の歴史学への転向の契機となる。
- 1912年（大正元年）帰国。  
東京高等商業学校の教授となり、商業史・経済史を担当する。
- 1920年（大正9年）大学昇格を機に異色の講義科目「文明史」を創設し、  
ヨーロッパ文化をその精神構造において理解せしめんとする格調高い講義を通じて、学内外に名声を博する。
- 1935年（昭和10年）～1936年（昭和11年）  
東京商科大学学長を務める。  
一方、家業の両羽銀行（現山形銀行）の頭取として、山形県の中核金融機関の基礎を築き、  
貴族院議員（1932、1937年）に勅任されたほか、1945年には日本銀行参与を委嘱される。
- 1947年（昭和22年）70歳で死去（8月14日）。

※文中敬称略。

※文中の出典は初出で、出所は『三浦新七博士——その人と軌跡』  
（財団法人三浦新七記念会刊、責任編集・國方敬司）。

※引用文中の旧仮名づかい、旧漢字は、現代表記へと改めました。

各界でユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち。その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちはいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

第23回は、アビームM&Aコンサルティング株式会社 代表取締役社長を務める、岡 俊子さんです。

聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

## 月下氷人、世は情け

### チームのために、社長の座に

山下 お久しぶりです。ご活躍ぶりを伺い、今日お会いできるのを楽しみにしていました。M&Aは金融危機に際して、がらりと価値基準が変わる業界ですね。そのなかで組織の舵取りをされるというのはどういうことかというお話を、ぜひお聞かせください。まずは経歴ですが、岡さんはトーマツに入社されたのでしたよね。

岡 等松・トウシュロス コンサルティングは、現在の組織、アビームM&Aコンサルティングを設立したアビームコンサルティングの前身なんです。途中2年間だけ朝日アーサーアンダーセンにいて、出戻ってきました。等松の組織が分裂して移籍、転職とボスに連れられて行き、アンダーセンでエンロン問題が起こり、先代の社長がそろそろ帰ってこいと。そこで6人のチームで戻ってきました。

山下 すごくワイルドな世界ですね。

岡 この業界は、そういう社会なんです。M&Aで自分も買う側にも回るし、買われる側にもなる。アビーム本体はNECが親会社なので買われた方でもあるのです。こちらに戻ってしばらくして、今の会社を作ってほしいとお願いをしました。

山下 「作って」と、岡さんが申し出たのですか？

岡 そうなんです。「私が社長をやるから」と。

山下 格好いい！

岡 NECの資本がアビームに入ってくると私たちの仕事が外部に見えにくくなってしまいます。それで仕事をやりやすくするために、アビームM&Aコンサルティングという会社を作っても

らえるように頼みました。

山下 社長という肩書きをくれというのは訳が違う（笑）。

岡 チームを抱えていましたから、みんなが仕事がしやすい形を作りたかった。

山下 岡さんのチームは今の会社をきっかけに結成されたのですか？

岡 いえ、昔から強いチームが欲しかったんです。一人の力は限られてしまうけれど、チームなら幅が上げられる。そこが組織の良いところだと思っています。

山下 いつから、チームが作りたかったのですか？

岡 実は、昔からなんです。30歳ぐらいのときにはそう思っていました。

山下 すごい！私も年齢的に指揮を執る機会も増えつつあるけれ



### 岡 俊子（おか・としこ）

アビームM&Aコンサルティング株式会社 代表取締役社長

アビームコンサルティング株式会社 戦略事業部長

1986年一橋大学社会学部卒業。同年、等松・トウシュロス コンサルティング株式会社（アビームコンサルティングの前身）入社。トーマツ コンサルティング（グループ内異動）移籍、朝日アーサーアンダーセン株式会社を経て、デロイト トーマツ コンサルティング株式会社（アビームコンサルティングの前身）プリンシパル就任。2005年より現職。内閣府経済社会総合研究所M&A研究会委員、M&Aフォーラム理事、対日投資有識者会議委員。ネットイヤーグループ株式会社取締役等のほか、明治大学グローバル・ビジネス科（MBAコース）と青山学院大学法学研究科大学院の非常勤講師も務める。ペンシルバニア大学ウォートンスクールMBA（ファイナンス及びアカウンティングのダブルメジャー）、米国公認会計士試験合格。

ど、本来は一人で勉強するのが好きなタイプ。でも、やってみるととても面白いですね。今は、世界一の、とはなかなかいかないので、とりあえず日本一の、マーケティング研究の拠点を作るのが目標！（笑）。

**岡** 私は仕事をする以上、自分の仕事に責任を持ちたいと思っています。そのためには、意思決定権を持つことが大切です。むしろ、チームのメンバーの納得が得られなければ仕事は前には進みません。しかし、少なくともこういう方向で行きたいと方向性を示すことができる環境にないと、仕事に責任を取ることはできません。

## 誰の下でも仕事に誠実でありたい

**山下** 最初からM&Aがご専門だったのですか？

**岡** もともと日本に海外の企業を連れてくるという対日投資でした。私が卒業した1980年代後半は、海外の企業が自分たちで日本に会社を作っていた時代。ところが90年代になると、日本に入



ってくるならM&Aという形が主流となりました。そのうちに海外から企業が入ってこなくなったので、日本の企業同士のM&Aにシフトしていき、2000年以降になると今度は再生の時代になりました。産業再生機構の案件もいくつかやってきて、今の基盤ができてきたという感じです。どこの会社を買うとよいか、いくらで買うか、買った後にどうすればよいか。それらをつなげるアドバイザーも自社で行うというM&Aのフルラインコンサルティングの形が整ってきました。

**山下** そもそもコンサルティング業界に入ろうと思われたきっかけは？

**岡** 学生時代、3年生の頃から北欧系のコンサルティング会社でアルバイトをしていました。ほとんど正社員に近い状態で（笑）。そこから時代にに応じて今につながった仕事に携わっていることとなります。

**山下** 本格的に社会に出られてからは、連れていかれ、そしてまた呼び戻される。岡さんが優秀な人材であったゆえでしょうが、世の中ではそんな話だと思いませんか。ご自身の分析で、どういう部分が評価されたと思われますか？

**岡** 相手の評価の話なので難しいご質問ですね。これまで、私は、誰の下で働いても常に誠実



に仕事をしてきました。そしてそのなかで、私としては、それなりの成果を出してきたと思っています。少なくとも、周りの人に損はさせていないのではないのでしょうか。呼び戻す側は、「こいつは少なくとも迷惑はかけないだろう」と思ったのかもしれませんが。

**山下** 岡さんの意識のなかに残っている大学で身に付いたマインドとは？

**岡** 実業の面白さでしょうか。面白いことをやるために働くんだと思っていました。だから早く働きたかったですね。

**山下** 今まで辞めたかったことはないのですか？

**岡** 会社を辞めて、どこかで遊んで暮らしたいというのはないですね。日曜日に仕事のアイデアを思いついて、「早く月曜日にならないかな」なんて思うことはよくありますよ（笑）。

**山下** そうでしたよね、学生の頃からそういう人でした（笑）。

**岡** どんな仕事であれ、面白いことばかりのわけがない。そのなかで、どうやって自分なりに仕事の面白さを見つけていくかだと思います。特に若い頃は面白い仕事ばかりとは限らないから、そのあたりは努力するように意識していました。半年先を読もうといつも努力しています。なかなか難しいけれど。当たった時はすごく嬉しです。少しずつですが半年先を読む力がついてきたような気がします。

**山下** それを読むのに毎日どんなアンテナを立てているのか、すごく知りたい！

**岡** 新聞は「日本経済新聞」しか読んでないですよ。あと男性週刊誌（笑）。私たちの仕事はデューデリジェンスもそうですが、事業環境を見ているんです。企業の業績が何と連動しているのかを分析しているので、いくつか動きのサンプルが出てくると“社会はこう変わる”とか“そっちが変わるとここにも波及する”というのは比較的わかりますね。

**山下** そのあたり、一橋で学んだことは役立っていますか？

**岡** 活かされています。マーケティングは学問であり、マインドであると思っていて、そのマインドを勉強させてもらいました。まさにマーケットインの発想です。だからマーケティング的感覚は大切にしています。今何が必要とされているのかということを見ないと、我々は生き残っていけませんから。

**山下** しかし、大学では必ずしも実践的なことばかりをやるわけではないと思いますが……。

**岡** 筋道を立てて考える、発想の基礎になっていますね。大学には本当に何か恩返しをしなければと考えているところです。

## 企業にM&Aの成功体験を持ってほしい

**山下** 経験を重ねてきた今、これから先の夢というものは？

**岡** お客様である企業にアジアをはじめ海外企業とのM&Aを成功

山下裕子（やました・ゆうこ）  
商学研究科准教授



させて、どんどん前へと進んでいた  
 だくことですね。今の日本の企業は  
 M&Aを使えばすごく強くなれる  
 はずなのに、成功率は3割程度とい  
 われています。使えていない企業が  
 圧倒的に多い状況、まさに岐路に立  
 っています。そこを何とか早い段階  
 で成功させて次の段階に進めていく  
 ことを、この先10年ぐらいでやっ  
 ていかなければと考えています。

**山下** 私も日本企業のマーケティング力を測定する仕事をしていて、海外対応力ができていないと感じています。国内では肌感覚で行える部分があるけれど、それが分からない外国では情報を通して分析しなければならない。国内でそういう仕事ができているのに、行って失敗して帰ってくるケースが多すぎるように感じます。今こそマーケティング力が必要だと確信しています。

**岡** もう一つ、日本企業は海外企業に対してガバナンスのとり方が上手ではない。日本の企業同士では「腹を割って話そうや」である程度分かり合えますが、異文化の資本関係がないところでは、どうやって相手を嫌がらせずに言うことをきかせるか。その手段が“飴と鞭”ですが、日本人はどちらも使い方が下手。植民地経営を400年以上やっているアングロ・サクソンには勝てない。その“飴と鞭”を体現するのは人事権ですが、株主がその一番のカードを切れない。買われた側の社長に「俺がやめたら困るよね」というふうになめられているんです。

**山下** つまりは、コミュニケーション力なのでしょうね。有力者を見極めて、ズバツと言えるかどうか。

**岡** そのとおりです。大企業はまだそうはいつでも経験がありますが、中

規模の企業には壁があります。この層のアジアの企業はグローバル展開しているの、経営力はアジア企業の方が上かもしれない。異文化や宗教の違いをちゃんと分かっているんです。

## まずGive、そしたらいつか還ってくる

**山下** 男女雇用機会均等法が制定されたのが1985年で、岡さんは翌年の卒業。これまでを振り返り、女性であることにメリットを感じたことはありますか？

**岡** メリットは大きいと思います。例えば、バラエティーが欲しいから女性もメンバーに加えようとすることがありますよね。女性があまり多くはない業界なので、私に声がかかる機会もあって、とても刺激になります。

**山下** ちょっと若いのに呼んでもらえるのね。

**岡** そういう場に出させていただけるとは、すごく感謝しています。もしも自分が男性だったら、多分呼ばれていなかったでしょう。おかげで、いろいろな方とお知り合いにもなれました。

**山下** デメリットはどうですか？

**岡** あまり感じたことはないですね。もしもあっても、すぐに忘れちゃう。自分が女性であることはコントロールできないし、そんなことを気にしても生産的ではありませんから。

**山下** ますまご活躍されるなか、チーム、組織の力を最大限に発揮するために心がけていることは？

**岡** みんながハッピーでいられるために、個々のメンバーがどのような状況にあるかについて、細かく気にかけてしています。また、組織を動かすためには、先憂後楽であることが必要だ

と思います。業績が良いときには、まず部下の報酬を手厚くする。自分は最後。そうやって初めて組織は私を信頼できるリーダーとして認めてくれるのではないかと考えています。



## 対談を終えて 「薩摩おごじよ」

情に厚く、肝っ玉の据わった薩摩おごじよである。温かく人を包み込むような笑顔、おっとりしているのにシッカリした言葉、耳に優しくお腹に染みる柔らかな声。チームから、クライアントから絶大な信頼を集める。

M&Aは企業のお見合いだ。釣り書、いやいや、デューデリジェンスをお手軽にでっちあげるような仲人には任せたくない。嘘八百を、「四百ずつ両方へ売る仲人口」、なんて、とんでもない。

立派な仲人さんには、相性を見抜く眼力がある。さらに、結婚後のあれこれまで指南してくれたりする。M&Aの成功には、単なる表面的な資産評価ではなく、マーケティングや技術的なシナジーなど無形資産のフ

ィットの検討も欠かせない。企業文化を融合させるポスト・マージャーも重要なスキルとして今後ますます重要性が増す。

仲人を雅に、月下氷人という。月下老人と氷上人の二つの中国の故事を結び付けた和製熟語である。前者は、『続幽怪録』にある運命の赤縄をもつ月下の老人の話に、後者は、『晋書一芸術伝』の中の、氷下にいる人と話す夢を見た男の話に由来する。硬質な中国的宇宙観を湛えた、情け容赦ない運命を読む預言者のイメージだ。

「ずっと同じことをやってるんですよ」と、謙遜されるが、欧米企業の対日投資から、日本企業同士の

M&A、企業再生、さらには、アジアでのM&Aと、その文脈はめくるめくように変わっている。個々の案件のレベルを超え、冷徹に世界経済の流れを読む力、それを元に事業を組み替える力が岡さんの凄さである。

人のお見合いは情けだけでも動くが、企業のお見合いには月下に、また氷下に大局を読む力量がものをいう。岡さんでなくては、と、長蛇の列ができる所以だろう。大局には感情で、小局には打算で動く輩が跋扈しているのだから。

大局において、月下氷人。小局において薩摩おごじよ。そうでなくては、「女の道は一本道にございます」なんて人生を全うできないのかもしれない。(山下裕子)

個性は主張する

# One and Only One

第 24 話

囲碁棋士六段（日本棋院東京本院所属）

平本弥星氏



Y a s e i  
H i r a m o t o

# 囲碁をやるため一橋に入学

一橋出身のプロ棋士はただ一人。私は常に「異端」だった。



## “碁”が一橋受験の最大の動機

平本弥星さんは、囲碁の専門棋士、平たくいえば「プロの碁打ち」である。段位は六段。

現在、日本の現役棋士の総数は、約450人。中には大学卒の棋士もいるが、一橋出身者は平本さん一人だけだ。

棋士の多くは、早ければ小学生、遅くとも中学生でプロの養成機関に所属し「院生」として専門棋士を目指し修業する。大学卒の棋士でも、大半は院生修業を経験している。また院生経験がない学生碁界出身者では、中退して棋士になったケースもある。

「院生修業の経験がなく、アマチュアの大学卒から棋士になったということでは、私は“異端”です。プロやアマ強豪の指導を受けることもなく、独学で上達しました。学生棋戦以外の一般アマ棋戦で活躍したこともありません」と平本さん。ではなぜ、平本さんは“異端”を承知で棋士になったのか。それを知るためには、平本さんの碁歴をたどる必要がある。

平本さん（旧名・畠秀史）が初めて碁を知ったのは、5歳のとき。母親（現姓・平本）の手ほどきであった。

「高校入学時（東京都立戸山高等学校1968年入学）の実力は、アマ初段程度。しかし、2年後にはアマ六段まで棋力が伸びたのです。私が高校へ進む3年前、全国高校囲碁選手権大会（旧・全国高校選手権）が始まりました。中学・高校と私は卓球部でしたが、この高校選手権が刺激となり、碁に目覚めました。私が入学した年、戸山高校は全国3位となり、3年生の夏には主将で準優勝。全国3位の主将であった囲碁同好会の先輩（二学年上）が一橋大学に進み、同高校で先輩の一学年上であったお兄さんも一緒に一橋に進んで、先輩兄弟は囲碁部の中心選手でした。私が3年生の秋、兄弟の活躍により、一橋は関東学生リーグの1部に昇格しました。そして、この先輩に『君も一橋に來い、待っているから』と誘われたのが、一橋受験の最大の動機です」

この受験動機での入学。“異端”とはいわないまでも、かなり“異色”ではないだろうか。

一橋に入学した平本さんが囲碁部に入ったことは、あらためていうまでもない。社会学部で長島ゼミ（長島信弘名誉教授・社会人類学）に所属した平本さんだが、勉学については「触れないほうがいい」ということであった。中学時代にドストエフスキーの『罪と罰』を読み文学に惹かれ、高校時代には実存主

義の旗手・サルトルに傾倒した平本さん。このことと「触れないほうがいい」ということとは深い関係があるのかもしれない。一方、碁は……。

「囲碁一筋というわけではなく、たいした勉強はしなかったのですが強くなりました」

今も昔も大学生にとって最も大きな棋戦は、1957年に創設された「全日本学生本因坊戦」（毎日新聞社主催）である。平本さんは、この学生本因坊のタイトルを「たいした勉強はしなかった」のに、大学4年生の1974年に獲得した。50年を超す歴史の中で、一橋で学生本因坊に輝いたのは、平本さんのみである。

学生本因坊を経て専門棋士になった人は、何人かいる。だがいったん就職して、社会人となってから専門棋士への道を選択したケースはごく少数。その最初の棋士が平本さんなのだ。学生本因坊のタイトルを獲得し社会人となった人のほとんどは、「アマ強豪」の道を歩んでいる。この点も平本さんは“異端”、または“異色”の存在といってよい。

平本さんの就職先は、「三菱レイヨン」だった。入社は、1975年である。

「私は大学卒業の直前に結婚しました。結婚を決めたから就職を考えたということです。同期の多くは、銀行など金融機関に就職。一橋から合繊業界を志望する者は少数だったと思います。私にとって就職の目的は、生活の糧を得ることと、仕事を通じて様々な経験を積むことでしたから、この業界、この企業でなければいけないということにはなかったのです」

入社後、平本さんは、三菱レイヨンを「居心地のよい会社だと思った」という。そして「おそらく10年は勤務するだろう」と考えていたとも語る。しかし、それとは裏腹に、翌1976年3月、ちょうど1年間の勤務で、同社を退職するのである。

## 棋聖戦創設とオイルショックを契機に プロ転向を決意

囲碁界を知る方には記憶を新たにしていきたい。記憶とは「名人戦問題」と呼ばれる騒動についてだ。

囲碁の名人戦は、読売新聞社が創設した棋戦である。

各新聞社は、棋戦を主催し契約



One and Only One



左・中／毎週金曜日に開催する「JoJoの会」では、まず1時間ほど講義を行う。次の一手をどこに打つか？考え方をわかりやすく解説していく。  
右／講義後に五面打ちの指導碁をする平本さん。ほとんど時間を使わずに、5人を相手につぎつぎと打っていく。



金を棋士団体の財団法人日本棋院（及び関西棋院）に支払い、棋戦の第一掲載権を得る。新聞の囲碁欄はこうして作られているのである。日本棋院は、読売新聞社に対し、名人戦の契約金引き上げをたびたび要求していたが、受け入れられなかった。そこで1974年暮れ、読売新聞社との契約を打ち切り、朝日新聞社に移すことにした。詳しくは省略するが、1年間のゴタゴタを経て、「名人戦は朝日と契約、読売は優勝賞金・棋戦序列第1位の新棋戦・棋聖戦を新たに創設し契約」という結論に落ち着いたのである。

「その結果、契約金はそれまでの約3千万円から億の単位に跳ね上がりました。契約金増は、名人戦、棋聖戦だけでなく、ほかの棋戦にも波及。契約金の増加は、賞金・対局料の増額をもたらします。実際、その額は従来の3、4倍になりました。当時、タイトル戦を競うトッププロを除くと、棋士の対局収入は大変少ないことを知っていました。しかし、棋聖戦の創設で、間違いなく底上げがはかられます。それならプロになってもやっつけられるのではないかと。そう考えたわけです」

平本さんは、大学時代、数は少ないもののプロとの対局を経験していた。その結果から「大学4年のときには、プロになれる力はある」という手ごたえを得ていた。

「プロ転向を決意した理由は、棋聖戦創設だけではありません。オイルショックの影響で、会社の経営は、希望退職者を募るという状況にまでなっていました。上司・先輩もよい人ばかりで会社に対する不満はなかったものの、現状と囲碁界の変化から、直感的に見えた次の一手が転向でした。加えて日本棋院の棋士採用試験には年齢制限の壁があり、採用時（翌年4月1日）に満26歳未満（現在は23歳未満）でないと受験できません。プロになる最初で最後のチャンス、そう感じたのです」

平本さんが三菱レイヨン退職したのは、前述したように1976年3月。日本棋院の棋士採用試験を受けたのは、同年7月～9月である。碁がすべての院生上位者が大多数で、結果だけの戦い。きわめて厳しい勝負の場だ。合格する保証はどこにもない。そこで「会社に在籍したまま受験することは考えなかったのか」と問うてみた。

「まったく考えなかったですね。落ちたらそのまま会社勤めを続ける。そんな甘い考えで受かるものではない。退路を断ち、

背水の陣で臨んでこそ道は拓けるという覚悟でした」

「プロになれなければ失業の片道切符」で試験に挑んだ平本さん。「もし失敗したら、とは思わなかった。年齢制限まであと1年ありましたが、それもほとんど考えませんでした。私は追い込まれば追い込まれるほど集中力が増すタイプですから」と言う平本さん。対局は、参加者14名の総当たりだから、13戦することになる。この年は採用数が少なく、入段できるのは2名半（3位が関西・中部の1位と決戦）。合格するためには、負け数3がリミットであろう。ところが、最初の6戦の成績が3勝3敗。早くも崖っぷちである。しかしここからが、集中力の見せどころ。以後、7戦全勝で1位合格を手にしたのである。

翌1977年4月、平本さんは「棋士初段」として、プロの世界に入った（囲碁棋士は初段から、将棋棋士は四段から）。



## 日本棋院の改革に力を尽くす日々

1977年にプロとなった平本さんは、同年二段、1978年三段、81年四段、84年五段と順調に昇段していった。五段は「高段者」となり、各種棋戦も二次予選からの参加になった（近年に予選方式変更）。この間、1980年には、棋聖戦三段戦で準優勝という成績を取めた。

平本さんが六段に昇ったのは、1996年。五段から六段まで、12年を要している。その間、平本さんは、日本棋院の将来に関わるいくつかの重要な提案を行い、それを形にしてきた。たとえば、インターネット事業。

「1980年代の後半から、それまで日本棋院に蓄積されてきた対局成績と棋譜について、データベースの構築を推進してきました。このデータベースは、日本棋院の重要な資産です。それを単に管理するだけでなく、真に資産として活用していく。当初から私は、この構想を持っていました。そして、資産の活用というアイデアを刺激してくれたのが、インターネットだったのです。すでにパソコン・ユーザーであった私は、ごく近い将来、インターネットの時代が到来することを直感しました。1994年のことです」

膨大な量におよぶ過去の戦績・棋譜をデータベース化。その



## One and Only One

日本棋院独自の資産を、「21世紀の情報伝達インフラとして発展する」インターネットを活用し事業化する。Windows 95の発売は、1995年秋。以後、インターネットが爆発的に拡大していったことは、周知のとおりだ。平本さんがインターネットによるデータベースの事業化構想を抱いたのは、その前年である。平本さんの先見性には注目すべきものがある。ただ、その推進には棋院の財政難をはじめ、難しい問題がいくつかあった。

その一つが棋譜の著作権である。データベース化された棋譜を「会員制による棋譜配信サービス」という形で事業化する場合、棋譜の著作権を明確にしておく必要がある。

「日本棋院の最大の収入源は、棋戦の契約金です。新聞社を筆頭とする棋戦の主催者に棋院が提供するものは、棋譜の第一掲載権です。棋譜の著作権まで主催者に譲渡しているわけではありません。では、著作権は誰の所有になるのか。具体的には、対局者なのか、日本棋院なのかということです。従来は、この点を曖昧にしたまま、棋戦契約をしてきました。しかし、データベース化した棋譜で事業を行うためには、日本棋院が著作権を確保することが不可欠になります」

日本棋院には、「棋士会」という棋士の互助機関がある。棋士会は、棋院の運営に直接かかわることはない。しかし、棋院の重要な決定について意見や同意を求められ、棋士の総意はしばしば運営に反映される。平本さんはある考えのもと、1998年、棋士会の副会長に立候補した。

「棋譜著作権の問題を解決するには、正式な規定に“棋譜の著作権は日本棋院に属する”という一項を明記する必要があります。従来の対局管理内規には、この他にも様々な問題点がありながら、関係者は避けて通っていたのです。私は、棋譜著作権問題の解決を念頭に置き、新たな対局管理規定を制定するために立候補しました」

規定の文案作成、棋院内の委員会ですり合わせ、棋士総会の議事進行まで一手に引き受けて、原案通り対局管理規定が成立。平本さんの苦心が実ったわけだ。

「著作権に詳しい弁護士を日本棋院顧問弁護士に迎え、作業を進めました。内容を噛み砕いて説明すると、『対局者は対局料を対価として、対局棋譜の著作権を日本棋院に譲渡する』というものです。このことは、対局管理規定の冒頭に明記されて



います。ただ、著作権は対局者にありますから、たとえば自分の著書に使うという場合などは自由です」

現在、日本棋院ではインターネットによる「情報会員サービス」を展開している。もちろん、棋譜の受信は有料である。



## 囲碁教室「JoJoの会」を通じ、普及に努める

「囲碁は、ファンという裾野とプロという高みが並立しなければ、衰退します」

これは、平本さんの危機意識が言わせる言葉にほかならない。

「ファンという裾野」とは、囲碁人口+ $\alpha$ だという。『レジャー白書』によると、2008年の囲碁人口は、250万人である。1988年は760万人。20年間ですべての3分の1に減少している。囲碁漫画『ヒカルの碁』の人気の影響で、2002年は480万人に回復したが、アニメ放映、雑誌連載が終了するとふたたび下降線をたどったのである。囲碁人口の減少や高齢化に加えて、+ $\alpha$ の低下が深刻な問題という。平本さんが強調する「+ $\alpha$ の低下」とは、必ずしも囲碁人口に比例しない、対価を支払ってプロの情報やサービスを楽しむファンの減少である。

過去10年、韓国・中国の若い棋士が世界戦を制してきた。日本も二十歳前後の棋士が代表になって活躍すれば、囲碁の人気回復につながるであろう。同時に、普及活動が重要。棋士にも、満足度の高いサービスが求められる時代である。

毎月第3土曜日は、如水囲碁同好会にて先輩たちを相手に四面打ちを指導する(如水会館囲碁室にて)。



## One and Only One

所は、JR山手線、東京メトロ東西線、西武新宿線の高田馬場駅の近くにある「高田馬場囲碁クラブ」。毎週金曜日の午後1時から、平本さんが主宰する囲碁教室「JoJoの会」の例会がここで開かれる。「JoJoの会」が生まれたのは、1994年。今年で15周年を迎える。

「『JoJoの会』は、レッスンがメインとなる教室。私のホームグラウンドといってよいでしょう。金曜日の例会には、会員の指導をしてくれる世話役を含め、40人近くの方が参加してくれます」

会名の由来は、一橋大学の後援会「如水会」の「Jo」と、平本さんが卒業した戸山高校の同窓会「城北会」の「Jo」を並べたもの。ただし、その理由は、平本さんが両校のOBだからということだけではない。

「世話役の中に、吉田道子さん、井上貞子さんがおられます。吉田さんは、戸山高校の先輩。井上さんは、私が尊敬する松本正雄先生のお嬢さんです。松本先生は、1926年に東京商科大学(一橋大学の前身)を卒業された大先輩で、最高裁判事や国家公安委員を歴任された法曹界の重鎮です。先生は大変な囲碁愛好家。1978年、初の一橋出身の棋士として挨拶にうかがったのが縁となり、1996年に94歳で亡くなるまでの18年間、毎月ご自宅で指導碁を打たせていただきました。吉田さんと井上さんを中心に、女性世話役の方々と一緒に教室を起こしたので、『JoJoの会』と名付けました」

「JoJoの会」の会員の棋力は、初級者からアマ八段までと幅が広い。そして、このような幅広い層が集う会はきわめて珍しいという。

「通常、強い人は強い人と打ちたいと思うものです。しかしここでは、高段者が下手(自分よりも実力が下の相手)の指導を積極的にやってくれます。私がお願いしなくても、教え、か

つ教えられる関係が自然にできあがっている。これが『JoJoの会』の文化です。碁の魅力は、勝ち負けを超えたところにあります。碁というゲームは、知らぬ間に脳全体を使っています。すると、脳に新しい回路が生まれ、どんどん活性化していく。「上達する」とは、脳に、ひいては自分の人生に新しい可能性が生まれることだと私は考えています」

「勝ち負けを超えて碁を楽しむ」ということは、会員の表情にも表れている。例会が終了して帰宅する会員の表情は、誰もが笑顔で実に満足げなのだ。

「誰が勝って負けたのか、表情を見ただけでは私にもわからない。勝っても負けても楽しい、碁を打つこと、考えることそのものが楽しい。皆さん、そう感じているのだと思います。この文化は私の理想ですから、幸せを感じています」

碁に対する社会的認知度と評価を高めることを目標に掲げる平本さんは、囲碁界での自身のポジションを次のように語る。

「松本先生は一言も言われませんでした。碁界のために私のやれることを精一杯やってほしいと思われていたのだと思います。私はそれを感じ、日本棋院での仕事や『JoJoの会』の指導、また執筆活動に全力を傾注してきました。もし、松本先生に出会わなければ、私の碁界での働きも、おそらくかなり違ったものになっていたでしょう」

これも一橋が結んだ縁である。さて、いかがであろう、平本弥星という棋士、さらにいえば人間は、本当に“異端”という言葉のみでくられる個性なのだろうか。

### ◆平本弥星(ひらもと・やせい)

1952年生まれ。旧名・島秀史。東京都出身。1975年一橋大学社会学部卒業。1974年学生本因坊。1975年三菱レイヨン株式会社入社。1976年3月同社退職。同年9月、日本棋院の棋士採用試験に1位合格。1977年より日本棋院棋士。



棋士として活動する傍ら、1991年から教育研究活動を行う。算数教育の実践的研究成果などの学会・論文発表を重ねる。写真は平本さんが自ら開発した小学校算数の教材ゲームカード。

平本さんの著書の数々



- A 『囲碁の知・入門編』  
集英社新書 定価：735円(税込)
- B 『こだわり講座1  
アマの負ける手・負けない手(黒番編)』  
日本棋院 定価：740円(税込)
- C 『こだわり講座3  
アマの負ける手・負けない手(白番編)』  
日本棋院 定価：740円(税込)
- D 『学研まんが新ひみつシリーズ 碁のひみつ』  
小井戸 繁・共著 学習研究社 定価：924円(税込)

# 文化の匂い——『ミシシッピー・マサラ』の彼方へ

## 臭い文化と臭くない文明

どこであったか、確か司馬遼太郎氏がこんなことを書いていて、その結論だけが印象に残っています。それは、文化と文明とはどこが違うかという話で、彼の見立ては、「文化は臭いの、文明は臭くない」……というものでした。「文化の香り」といったハイカルチャーではなく、臭みを伴う「匂い」に焦点をあてる文化観でしょうか。「臭くない文明」ということで言われていたのは、漢帝国やローマ帝国のような、様々な民族を統合する帝国の観念様式、ある種のグローバルゼーションをもたらすシステムのことでした。たとえば儒教。儒教とは何かという話になればおおごとになってしまいますが、それをたとえば「礼」、つまり「外的な行儀作法の規則」という点だけにアクセントを置いて理解すれば、誰がどの民族を出自としようが、一定の作法に従って振舞う限りその能力を公平に評価されて出世できる（阿倍仲麻呂のように）システム……と解することができるし、それに基づいて中国の諸帝国は運営されてきたと言えるかもしれません。

## 匂いの衝突としての文化摩擦

このように、文明と称せられるものは、あれこれの民族的文化的特性からニュートラルで、どこからも比較的容易にアクセス可能な技術なり礼法なりを作り出すのに成功していると言えます（この意味で、銃器などの武器の類いはきわめて「文明的」ですね、悲しいことに……。自然科学一般も、基本的には「文明」に連なるのでしょう。ローマ法がどちらになるかは、にわかには判断できません）。逆に言えば、自分たち固有の文

化的特性を脱色・脱臭することに成功した「元文化」のことを「文明」と呼んでいるのかもしれない。

これに対して文化とは、個々の地域共同体特有の歴史風土や生活様式に直接由来するもので、なかなか外部には広がらないし、また外部者を排除するような閉鎖性ははらむことも多い。文化の「臭さ」の所以でしょう。外部排除力は内部凝集力にもなるので、この匂いは、ときにはパトリオティズムを着火させる燃料になったりもします。以前、『ミシシッピー・マサラ』という映画を岩波ホールで観たことがあり、これもまた記憶はおぼろげなのですが、アフリカ生まれのインド人の娘が、家族とともに流れ流れてアメリカ合衆国の南部に辿りつき、そこで知り合ったアフリカ系アメリカ人青年と恋に落ちるその物語にも、文化の強烈な匂いの衝突が印象的でした。

白人対黒人という形の文化衝突がよく語られますが、非白人同士の間でもきわめて激しい文化摩擦が生じます。恋に落ちた二人は、アメリカ合衆国においてマイノリティがぶつかる困難をはね返すべく身を寄せ合うそれぞれのファミリー（母集団）同士の強烈な文化的衝突に翻弄されるのです。この衝突の第一の局面は、それぞれの家の宗教儀礼でしたが、もうひとつが、三度三度繰り返される食事であったように思います。映画全体に漂っていたのは、タイトルにもある「マサラ」（インド料理の香辛料）の強烈な匂いでした。

## 衝突が生み出す新たな調和

チーズにせよ、納豆にせよ、キムチにせよ、まあ、外部者には臭いのですね。しかし、そういう雑多な匂いを脱臭して「文明化」しない限り、人は繋がれず、

恋も成就できないものなのでしょうか。「脱臭なし」のガチンコ文化融合というシナリオを遠望するにはほど遠いのですが、ひとつ小さな例を挙げて結びにしましょう。それは、キムチと納豆……。両者とも匂いの王様みたいなもので、私の少年時代など、かつてそれは日韓の文化障壁の象徴みたいなものでした（笑）。しかし実はこれ、混ぜ合わせてみるとビックリするほどおいしいんですね。バタートーストとからし明太子のコラボなどもあわせてお試し下さい。



作品名：ミシシッピー・マサラ  
制作国：アメリカ合衆国  
制作年：1991年

監督：ミラー・ナーイル  
メインキャスト：デンゼル・ワシントン、  
サリター・チョウドリー、ロシャン・セス

Love of Culture  
Movie

古茂田 宏 社会学研究科教授

# 国際試合という名の異文化体験

「それでは、カナダvsU.S.A.決勝戦の審判クルー7名を発表する。」スーパーバイザーのトニーの言葉に、部屋中が静まり返った。アメリカ・オハイオ州で開催されているアメリカンフットボールのジュニア世界選手権大会2009（JWC：Junior World Championships）で、審判仲間としてこの1週間ともに切磋琢磨してきた33名の中から決勝戦のクルーに選ばれるのは誰か。「アイナー、ゾルタン、ジム、ヘニング、ファン、ジン、フランク、以上の7名だ。Congratulations!」。一瞬自分の耳を疑った。願ってはいたものの国際大会初参加の自分が選ばれるとは思ってもいなかったからだ。



## 14カ国33名の審判が集結

国際アメリカンフットボール連盟が主催するジュニア（19歳以下）選手による世界大会の記念すべき第1回大会には日本、カナダ、アメリカ、メキシコ、ドイツ、スウェーデン、フランス、ニュージーランドの8カ国が出演し、米国プロ・フットボールの殿堂があるオハイオ州キャントンにおいて熱戦が繰り広げられていた。国際的なのはチームだけではない。審判も世界14カ国から33名が召集された。出身地域が違えばルール適用も微妙に違い最初は戸惑ったが、1回戦、2回戦をこなす中でお互いが打ち解けてきた。最終戦の4試合を残すのみとなり、今ここで決勝戦、3位決定戦、5位決定戦、7位決定戦の審判クルーが発表されたのだ。

## 決勝戦のジャッジ

JWC決勝戦の日曜日はアメリカの独立記念日の翌日だった。久々の好天ということもあり、キックオフの午後1時頃には、地元アメリカが優勝することを信じて疑わない15,000人以上の観衆でスタジアムは埋まった。アメリカに不利なジャ

ッジに対して容赦ないブーイングが飛ぶ。

自分のジャッジが普段に比べて硬くなっているように感じる。思ったようにずっと動けないのだ。ビッグゲームほど“Take your time（余裕をもて、間をとれよ）”と試合前トニーにアドバイスを受けたことが何度も頭をよぎるのだが、動きが緩慢と感じる分、それを取り戻そうとつい焦って、力んでしまう。とにかく気持ちだけは切らさずに、もどかしさと戦いながらグラウンドを走りつづけた。試合終了のホイッスルが鳴ったとき、大きなミスもなく無事終わってほっとした自分がいた。普段なら、うまくいってよかったなあという心地よい疲労感に包まれるのだが、こんな守りに入るのは初めての経験だった。

## 「アウェー」で実力を発揮する難しさ

国際試合であっても平常心でジャッジを、と心がけたがなかなかうまくいかなかった。考えられる要因はいくつかある。初めてチームを組む審判仲間ゆえ、信頼関係が十分に出来上がっていなかったのだろうか？ファンの熱狂的な声援やブーイングには慣れていたつもりだが、それに影響された部分も少なからずあったのではないかと？テレビで生中継されている中、見られているからミスができないという意識が少なからずなかったか？どれをとっても初めてづくしの経験だった。仕事柄、「アウェーでも自分の実力を発揮できる自信」を留学で身につけて欲しいと学生たちにいつも説いているが、いみじくも国際試合の決勝戦という舞台上でこの言葉の大切さを実感することになるうとは。アウェーでの平常心とは、慣れない環境で場数を踏んでこそたどり着ける境地なのだろう。

試合後、アメリカ人らしき親子が僕のそばに寄ってきて、「あの、フラッグをいただけませんか？」と尋ねられた。日本の旗を持ち歩いているとでも思われているのだろうか？「フラッグって何のこと？」と聞き返すと、少年は僕の腰につけている審判のイエローフラッグ（反則を示すためのハンカチのようなもの）を指差した。何十年か後の国際大会でこの少年がすばらしい審判として育てられているといいなと思いながら、フラッグを手渡しグラウンドを後にした。



## Love of Culture

アメリカンフットボール

## 国際試合



阿部 仁 留学生センター准教授

## 敬愛するドラムの神様

18世紀のイギリス・アイルランド文学を専門にしていますが、趣味はいろいろある中で、18歳のときに始めたドラムが筆頭に挙げられます。中学のときの同級生たちが作ろうとしていたバンドにドラム担当として半ば強制的に加えられ、全くの素人でした。ここで、紹介したいのは、私が好きなあるドラマーです。

## “God”の称号を持つドラマー

最初にこのドラマーが演奏しているのを聞いたのは、1974年のBob James, *One*というアルバムです。Mussorgskyの曲をジャズにアレンジした“Night on Bald Mountain”の切れ味鋭いドラムには驚きました。それまで聞いたことがない種類のものでした。ドラムを演奏していたのはSteve Gaddという人で、以後35年間ずっと私のアイドルです。彼以前にも以後にも名ドラマーはたくさんいますが、そのほとんどはジャズ、ロック、ポップス、R & Bなど特定の音楽ジャンルにおいては有名でも、どのジャンルでも活躍してきたのはSteve Gaddを措いて他にはいないでしょう。

Tony Williamsなど、多くのジャズ・ドラマーの名手たちから影響を受けたSteve GaddはSteve “God”といわれるほどのドラムの達人です。何がそんなに凄いのかといえば、テクニックは勿論、あらゆるジャンルに対応できる彼の音楽性です。音大で修士号を取った彼の「ルーディメンツ」(スティックを扱う基本の技術)は、幅広く応用され、しかも、彼以外に誰もまねのできない形で、様々なジャンルの音楽に活かされています。どんなに複雑な長い曲でも、シンプルなディスコのような楽曲でも同じように難なく演奏します。いいドラマーに共通していえることは、実際はテクニック的に難しいことを演奏していてもそれが「流れるように」聞こえることです。

## 数々のトップアーティストのアルバムに参加

では、Steve Gaddの数ある参加作品の中から、代表的な作品をいくつか挙げておきます。まず、彼が参加した曲で初の全米シングル1位になったVan McCoy & the Soul City Symphony, “The Hustle” (1975)。Eumir Deodato,

*First Cockoo* (1975) の中でも“Caravan/Watusi Strut”という曲でのエスニックなドラムは異色です。Chick Coreaとの共演アルバム*Leprechaun* (1975) と*Friends* (1978)。Steeley Dan, *Aja* (1977) のタイトル曲は多分Paul Simon, “50 Ways to Leave Your Lover”などと共に一般リスナーに最もよく知られている彼の演奏のひとつでしょう。1981年ニューヨークのセントラルパークで行われたSimon & Garfunkelの野外コンサートには50万人が集まったといわれますが、このときの2人のドラマーのうち片方がSteve Gaddでした。1990年代から2000年代にかけてはEric Claptonのバンドへの参加によって、より若くより広い世代にも知られるようになりました。1996年、ロンドンのハイドパークでの野外コンサートでは、15万人の聴衆の前でSteve Gaddが演奏しています。

## YAMAHAのドラムセットがトレードマーク

Steve Gaddと日本とのつながりが長く深いことも好きな要因です。1974年にオノ・ヨーコのバンドのメンバーとして初来日して以来、ほぼ毎年のように誰かのパフォーマンスのために来日しています。彼は外国人ドラマーの中でも最も早くヤマハのドラムを使い始めたひとりで、現在に至るまでヤマハの黒いドラム・セットは彼のトレードマークです。日本との関連でジャズ・フュージョンの歴史上重要なアルバムを3枚挙げます。『深町純 & ニューヨーク・オールスターズ・ライヴ』(1978)、渡辺貞夫『ハウズ・エヴリシング』(1980)、そしてSteps Ahead『スモーキン・イン・ザ・ピット』(1980)で、いずれも日本でのライヴ・パフォーマンスを記録したものです。Steve Gaddの唯一のリーダーアルバム*Gaddabout*は日本のキング・レコードから1984年に出されています。

Steve Gadd



# 地球の風 地域の風



一橋大学と「極真大学」で学び、  
やりたいことをやっていたら大ブームになった。  
これからは「日本の“<sup>どう</sup>道”哲学」を広めたい。



財団法人極真奨学会国際空手道連盟  
極真会館浜井派代表

浜井識安氏

## 『世界ケンカ旅行』が導いた 空手との出会い

空手との出会いは中学時代です。出身は能登の七尾。小学校時代は柔道の茶帯（少年部では最高位）でしたからケンカが強いと思われていたようです。そのせいか、中学入学早々に3年生の先輩たちに図書館に呼び出されたのです。番長とその取り巻き5、6人に囲まれて、理由も言われずボコボコに殴られました。柔道には多少自信がありましたが、組まなければ相手になりませんし、一度に大勢と組むことはできません。折から、大山倍達先生の『世界ケンカ旅行』という本を読んでいたから、「これは空手しかないな。東京に行ったら空手を習おう」と思ったのです。

中学、高校には空手部がありませんでしたから柔道を続けました。ところが、高校2年生になったとき、元平恒昭先生が赴任してい

したので、先生を顧問にして空手同好会ができたのです。こうして、松濤館流空手の基本を週1回、2年間学びました。

## 100枚の紙に書いた目標 「一橋大学に入る」「極真空手を習う」

少し戻りますが、中学生のときにC.M.プリストルの『信念の魔術』を読みました。(1) 信念は現実化する、(2) 目標は必ず紙に書き、(3) 期限をつける、という彼の主張こそ、成功の前提条件だと確信しました。そこで、「一橋大学に入る」「極真空手を習う」と名刺大のカード約100枚に書いて、机から居間、寝室、トイレ……と、目に付きそうなあらゆるところに貼り付けました。極真空手を習おうとしたのは、大山先生へのあこがれがあったからです。では、なぜ、一橋大学を目標にしたのか。実は、最初は東京大学を目指していました。あるとき、父親に「東大に行きたい」と相談すると、



石川支部創設当初の写真。  
極真会館総裁・大山倍達先生とともに。

「何をしに行くんだ」と聞き返されました。私は鉄鋼王のアンドリュー・カーネギーに憧れていましたから、「実業家になる勉強をしたい」と答えたのです。父の答えは明快でした。

「商売をやるつもりなら東大は合わないだろう」

「それなら、どこがいいのだろう」

「東京商科大学が前身の一橋大学が、何といても一番だよ」

一橋と聞いて、幕末に活躍した最後の将軍が一橋慶喜ということ思い出しました。「いい名前だな」と思って、自分の実力も省みずに一橋大学を目標とすることにしました。

3年生の春の模擬試験では、一橋大学への合格の可能性は25%でした。「これでは、目標を変更しなければまずいかな」と思わないこともなかったのですが、ぶつかる前に逃げてしまうのは性に合いません。それに大学受験はひとつしか受けられないわけじゃない、たくさん受ければいいと思いました。そこで、夏休みには1日平均11時間勉強しました。冬休みには1日平均17時間、寝ているときと食事、トイレ以外は勉強しました。目標を掲げたおかげで、一橋大学の法学部をはじめ受験した6大学8学部のすべてに合格することができたのです。

大学では、当然、空手部に入りました。小平キャンパスから道場のある国立キャンパスに通い、平日は毎日午後3時45分から2時間練習。7月からは週2～3回、終了後にすぐ中央線に飛び乗って池袋の極真会館で練習しました。こうして、「一橋大学に入る」「極真空手を習う」という高校時代の目標をクリアしたわけです。

## 能登・七尾から国立に通学 何とか卒業する

2年間教養課程で学んでいるうちに、自分が本当は何をやりたいのかわからなくなってきました。目的のわからないまま勉強しても仕方がないと思って1年間休学。いろいろなアルバイトをしながら考えました。そのときにふと、弁護士にならないのなら法学部にいてもしかたがないと考えて、商学部へ転部したのです。

3年生として復学したときに、両親が離婚。家庭の事情から、家業である紳士服店を継ぐことになりました。大学は絶対に卒業したいと思っていましたから、思いあまってゼミの森田哲彌先生に相談しました。すると、「キミね、1週間に1度来られるんなら、何とか卒業させてあげるよ」と言ってくださったのです。この言葉に勇気を得て、1週間に1回、能登の七尾から、大学のあ

る国立までゼミのために通ったのです。結局、休学期間も入れて8年もかかりましたが卒業することができました。今でもたまに、「これでは卒業できない!」と苦しんでいる悪夢を見ます。

七尾に帰ったときは、21歳、極真空手の茶帯でした。そこでは高校時代の恩師である元平先生が公民館で松濤館空手を指導なさっていましたから、私もそこで教えていただいていた。そのとき、『週刊少年マガジン』で「空手バカ一代」の連載がはじまり、極真空手がブームになったのです。

## ゲタをはかせてもらって 支部長になった?

いまは学校の教員をしている青山君という少年が、空手の練習をしている私のところにやってきて言いました。

「浜井さん、極真空手をやっていたんでしょう。なんでここで寸止め空手をやっているんですか?」

「恩師が松濤館空手なのに、恩ある先生の下で他流派の空手のできるわけがないだろう」

「極真空手をやりましょうよ。ボクが会場を借りてきます」

こう言って本当に小学校の体育館を借りてきたのです。こうして2人で練習していると、習いたいという仲間が増えて1年後には40人にもなりました。そこで、大山先生に、「地元で空手を教えているのですが、弟子が40人になりました。いつまでも白帯ではかわいそうなので東京の大山館長のもとで審査を受けさせてもらえませんか?」と電話をしました。先生の返事には驚きました。「それなら、キミが支部長をやたまえ」と言うのです。支部長は二段以上が決まりですから、「実は私は茶帯です」と言うと、「キミ、明日から黒帯だ」と言ってくれました。それでも本気とは思えずに、「本当にいいんですか?」と聞くと、「審査するのは大山倍達だ」との返事でした。

実は、大学1年でまだ白帯のころ、極真会館で全日本チャンピオンと組み手をしていたときに、相手をノックアウトしてしまったことがありました。そのときは、相手がチャンピオンでも当たり所がいいと倒せるのだと不思議な気分でした。また、大学2年で茶帯に



腕立て伏せ100回、腹筋100回、スクワット100回とストレッチ。準備運動だけで全身汗だくとなる。無理して一気に100回やる必要はなく、トレーニングを習慣化させることが重要。20回×5セットと、はじめは何回かに分け、慣れてきたら1回あたりの回数を増やしていくと、無理なくレベルアップすることができる。





なったときには、全国で第6位になりました。そんなこともあって、大山先生が浜井という名前を覚えてくれていたようでした。大山先生は徹底した演繹法思考の持ち主です。支部長をやらせれば支部長らしくなるだろう、といった発想で大胆に任せてくれたのです。

私としてはゲタをはかせてもらった支部長では後ろめたいので、後日、二段の条件である20人組み手に挑戦して、達成しました。

支部長になったころは、いわば極真空手ブームで、あっという間に弟子が100人になりました。一方で家業の紳士服関係の経営状態が悪かったので、それを売却して金沢に道場を建てました。1980年、24歳のことです。3年前の時点では石川県の人口約120万人のところ極真空手の会員は1,180人でした。

もともと私はビジネス志向でしたから、支部長として空手を教える一方で、レンタルビデオ会社の「ビデオシティ」を起こしました。エスポ会社という会社に10億円でヘッドハンティングされてゲオ（GEO、現在東証一部上場）というオーディオビデオ部門の営業本部長を務めたこともありました。「ビデオシティ」は

年商35億円規模にすることができましたが、結局は昔の仲間が経営に携わっている上場企業ゲオ（GEO）に株式交換で会社を売却しました。また、あるレンタルビデオ会社にヘッドハンティングされて、本部長を務めた時期もあります。

やりたいことをやったら大ブームになったという感じで、こんなことは二度とはないでしょう。しかし私は、一橋大学と「極真大学」を出たからこそ対応できたのだと思っています。

## ひよんなキッカケから 大連に支部を開いて指導を開始

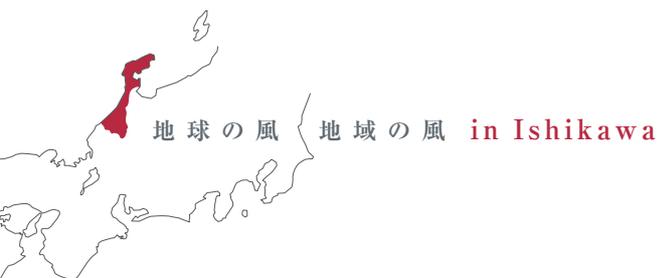
50歳になって実業家を引退したときに、家族での海外旅行や魚釣り、ゴルフなど、これまでできなかったことを始めました。ところが、3年もすると飽きてしまいました。そんなときに上海に家族旅行に行ったのです。上海には派閥は違いますが極真会の拠点が15カ所あり約3,000人の弟子がいました。中国人にも極真空手が受け入れられているのです。

家族旅行で大連に行ったこともありました。ここは富山空港から約2時間～2時間30分と近く、町の雰囲気が名古屋に似ています。大都市でありながら、どこか庶民的なのです。「ここで空手道場をやったら面白いな」と思って、弟子に話したところ、「やりましょう。ボクたちも手伝います」と言ってくれました。しかし、弟子たちは自分の道場を持っているので自由に動けません。結局、自分で道場をつくって始めるしかありませんでした。おかげで、中国の若者たちに武道の心を伝えるという、新しい目標ができました。

## 成功の法則と「日本の“道”哲学」を 若い人たちに伝えていきたい

C.M.プリストルのやり方を参考にして、1992年に『人生経営の教科書』という本を書きました。人生で成功するには目標設定が重要だということを伝えたいと考えたからです。「頭は低く 目は高く 口慎んで心広く 孝を原点とし他を益する」という大山倍達先生の言葉があります。この「目は高く」というのは目標設定の重要性をいっています。例えば、空手の世界チャンピオンを目指すという目標を立てれば、いま練習で腕立て伏せを50回やっている人間が、100回やるようになります。目標が決まると、いまが変わる。行動が変わってくるので、目標は早く決めた方がいいのです。

そしていま、「日本の“道”哲学」をテーマにした本を執筆中です。吉田松陰、鈴木正三、石田梅岩、上杉鷹山ら日本人の教えや



←良い音がするイコール効果があるわけではない。短い距離で鋭く重い蹴りが、試合にも有効な実践的な蹴りなのだ。

→金沢市内にある総本部は、2階建て。1階は空手道場、2階はキックボクシングの練習場とリングがある。



生き方には精神哲学があります。『葉隠』、『武士道』（新渡戸稲造）などの武士道哲学には生き方が示されています。命を懸ける剣道から武士道が生まれ、柔道、空手、合気道、茶道、華道、香道が派生してきました。大山先生も、「日本の武士道精神は人類がつくった最高の人生哲学だ」と言っています。

現在ではサムライ階級はありませんが、日本にはサムライはたくさんいます。私のいうサムライとは昔の侍、武士ではなく、自分の信念に基づいて生きる道を歩んでいる人のこと。例えば、トヨタが世界一になったのは、トヨタが日本の製造業“道”だからです。極論すれば、日本は資本主義ではなく、資本主義道、会社道の国です。日本では株主が一番偉い存在ではなく、一番はお客様。二番が社員、三番が役員や社長、そして株主。“道”哲学を持ったサムライ資本主義であれば、こうなります。近年、巷でいわれている株主至上主義の金融資本主義とはまるで正反対なのです。日本人は資本主義道を歩むべきなのです。

だから山一證券の社長は「社員は悪くありません。悪いのは社長と役員です。優秀なわが社の社員の再雇用をお願いします」となるのです。これに対し、自社に対する税金投入を頼みに自家用ジェット機でやってきて「自家用機を売却し帰りは民間機で帰るのか？」との問いを拒否した某国の最高経営責任者たち。社員思いの社長と自己中心のCEO、これも正反対ですね。

最近のことでは第2回WBCでの原監督とイチローです。あたらないイチローを先頭バッターで使い続ける原監督、その采配には賛否両論あると思いますが、しかし道哲学では求道者の象徴イチローをはずすことはできません。原監督本人に自覚があるかどうかはべつにして、まさにサムライジャパンの監督です。その結果のWBC 2連覇、本当に感動させられました。日本ではベースボールも野球、否、野球道なのです。日本人はスポーツもスポーツ道にしてしまうのです。

極端に言えば悪人・やくざでさえ「極道」という道にしてしまうのが日本人なのです。

あるマスコミ関係の中国人の知人から面白い話を聞きました。シベリアに抑留されていた日本人がロシア人将校に、「ノルマのほかに作業をしたい」と依頼したというのです。近くの木を切ってログハウスのダンスホールを造りたいというのです。実際に自主的にログハウスを造り上げて、「一緒に踊りませんか」とロシア人将校を誘ったといいます。日本人にとっては仕事こそが生きがいののです。罰として労働を与えていたロシア人たちは驚いて日本人たちを尊敬するようになったとのことなのです。

日本人の“道”哲学のナンバーワンが活人道。あらゆる技術、

技法、作法を人の道、生きる道、修行としてしまうのが、第一原理です。そして第二原理は、働くことを仕事道としてしまうこと。日本人には労働という言葉は似合いません。欧米では労働は神から与えられた罰。これに対して日本では、働くことは、端を<sup>はた</sup>楽にすること。やりがい、生きがい、誇り、喜び、他者を楽にして自分に厳しく、心と魂を磨く尊い修行なのです。そして親孝行から、社会に対する感謝の気持ちが出てきます。

私がよく言うのは、「極真武道空手は力と感謝」です。武道である以上、勝たなければなりません。しかし、自分だけで強くなったわけではありませんし、感謝の心がなければただの暴力になってしまいます。感謝の原点は親孝行です。また、武道に完成はありませんから、初心が原点です。道着が白なのは初心に戻ることの重要性を示しています。黒帯を一段といわず初段というのも黒帯になって初心・原点に戻るという意味です。

武道では免許皆伝書（最高の秘伝技術書）さえ白紙（つまり初心・原点に戻れという意味）であることも多いのです。「最高の技術」を上回る「最高の心構え」を教えているわけです。しかし海外でこれをやったら詐欺と間違われるでしょう。

日本人の精神は海外と正反対ですね。理解されにくいでしょう。それに当の日本人が実は本当の日本精神「道哲学」の価値を知らないのです。集合知であるため自覚がなく、言葉や論理で説明もできないし、系統立てて教えられてもないためです。そのため世界の人々にも説明できないし、誤解されやすいのです。

しかし、この日本精神「和の哲学」と「道哲学」によって明治維新も含めて、日本人はそれ以後日露戦争勝利、大東亜戦争敗戦、戦後23年でのGDP世界第2位、2008年世界の製造業の象徴「自動車産業」でのトヨタの世界一数々の奇跡を世界の歴史に起こしてきているのです。

本年中にこの『日本の和の哲学から生まれた奇跡の道哲学』という本を出版するつもりです。

振り返ってみると、『信念の魔術』と『世界ケンカ旅行』に出会わなければ、極真空手をやっていませんでしたし、一橋大学にも入っていませんでした。これからも、日本で、大連で、自分の体験や身に付けたものを多くの人に伝えていきたいと思っています。

#### ◆ 浜井識安（はまい・のりやす）

石川県七尾市出身。1972年一橋大学法学部入学、1972年7月財団法人極真奨学会国際空手道連盟極真会館池袋総本部入門。1973年11月極真空手第5回全日本空手道選手権大会第6位入賞。1977年5月極真会館石川支部長就任、1977年11月極真空手第9回全日本空手道選手権大会第4位入賞。1980年一橋大学商学部卒業。2006年5月財団法人極真奨学会国際空手道連盟極真会館浜井派設立、代表に就任。2007年4月財団法人極真奨学会理事に就任。



→ 極真空手普及のための著書および自らの体験を元に目標達成の秘訣をまとめた著書。『人生経営の教科書 誰も教えてくれなかった勇気2対自信1の人生学』  
浜井識安／著 青龍社刊  
『カラテ革命家「浜井識安」極真新理論』  
浜井識安／著 フル・コム／編 東邦出版刊  
『極真英雄列伝 地上最強を具現する男たち』  
大下英治／著 しょういん刊



## 一橋大学基金へのご協力、 心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2009年8月末現在で、総額約24億円に達しました(うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ)。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2009年6月1日から2009年8月末日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載しておりません。また、ご寄付者が万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡ください。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に永く留めさせていただきます。また、30万円以上(法人100万円以上)のご寄付に関しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。



なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

### ご寄付のお申し込みについて

●お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。

●一橋大学基金ホームページより、クレジットカードによるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申し込み」メニューからお進みください。一橋大学基金ホームページ

<http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

### 如水会会員証カードを お持ちの卒業生の皆様へ 分割ご寄付のご案内

一橋大学基金では(社)如水会と連携し、如水会会員証カードによる分割ご寄付の受け付けをしております。

お申し込みいただきますと、如水会会員証カードから定期的に自動払い込みにてご寄付を頂戴することとなり、お振込の手間を省くことができます。

また、ご寄付の回数は、年1回(2月または8月)と年2回(2月および8月)よりお選びいただけます。如水会会員証カードをお持ちの卒業生の方はぜひご検討ください。

詳しくは、ホームページをご参照いただくか、下記までお問い合わせください。

**【お問い合わせ先】**  
一橋大学基金事務局  
〒186-8601 東京都国立市中2-1  
TEL: 042-580-8888  
FAX: 042-580-8889  
E-mail: kikin@ad.hit-u.ac.jp

【ご寄付者ご芳名】 ※五十音順に掲載させていただきます。

#### 卒業生

501名・9団体 (63,029,127円)

ご寄付金額(累計)

100万円以上	50万円以上 100万円未満	50万円未満
10名・1団体	16名	475名・8団体
石原道郎 様 和泉信一 様 大塚久美子 様 曲 傳銘 様 相村寛道 様 深川登代仲 様 宮本雅雄 様 吉崎達彦 様 昭和31年入学 N組喜久会 (二木会) 様 他2名	相原 稔 様 逢見直人 様 奥村一郎 様 木村 幹 様 合田正彦 様 小楨達男 様 城森 宏 様 鈴木崇司 様 高木重知 様 辻巻 孝 様 内藤元巳 様 永島 宏 様 福田清成 様 真栄城朝敏 様 山村輝夫 様 吉村尚憲 様	相場正樹 様 青木英司 様 青木孝之 様 青木 透 様 青木要輔 様 青山 伸 様 赤木功昇 様 秋月程賢 様 穂本守雄 様 秋本泰彦 様 浅原康宏 様 阿部源次郎 様 荒川憲一 様 荒木昭彦 様 荒澤俊彦 様 有川正和 様 栗田 宏 様 五十嵐和幸 様 池田喜志高 様 池田太郎 様 井坂昌生 様 石井 徹 様 石井利一 様 石上栄一 様 石神則昭 様 石川克美 様 石川勝美 様 石川友彦 様 石川芳治 様 石下志郎 様 石田定夫 様 石田 肇 様 石田政明 様 石橋國博 様 石原 滋 様 井関直彦 様 井関勇司 様 市村陽典 様 伊藤 彰 様 伊東一彦 様 伊藤俊之 様 伊藤 寛 様 稲垣正武 様 稲熊豊彦 様 今村 卓 様 入山晃嗣 様 岩崎弘倫 様 岩瀬 建 様 上田英一 様 植月俊勝 様 宇佐見衛 様 内田安茂 様 内海和之 様 梅澤忠徳 様 梅田 純 様 梅原敏正 様 梅本圭一郎 様 江川 中 様 江口正昭 様 江藤修治 様 榎本次男 様 榎本洋介 様 遠藤伸一 様 遠藤恒夫 様 遠藤敏男 様 大石克洋 様 大久保裕晴 様 大坂一義 様 大島誓一 様 大島資正 様 大羽宏一 様 大堀一充 様 大山武志 様 岡田円治 様 岡田義雄 様 岡本 正 様 岡本正彦 様 小川善平 様 小川哲男 様 小河原公男 様 奥山ロバート智巳 様 小瀬 力 様 小瀧正美 様 落合大祐 様 小野延孝 様 小野正志 様 折茂 進 様 加賀谷弘一 様 柿田智行 様 鹿毛雅彦 様 菓子野 廣 様 風岡 明 様 片桐信四郎 様 加藤 厚 様 加藤典夫 様 加藤弘志 様 加藤真美 様 金井 彬 様 金子恵美 様 金子亮太郎 様 紙屋 聡 様 唐澤 誠 様 河合浅雄 様 川口 卓 様 川島敏裕 様 川西三郎 様 川野仁志 様 河邊瑞治 様 川村泰久 様 神田敏紀 様 神田芳雄 様 菊地政夫 様 菊原啓行 様 北野尚文 様 北林克比古 様 貴堂 聡 様 紀国 亮 様 行天 清 様 清野秀樹 様 桐山良則 様 久下達也 様 窪寺 啓 様 熊谷良貴 様 組野 繁 様 久米洋二郎 様 黒崎弘康 様 黒瀬恵一 様 黒田晴二 様 桑高早苗 様 桑名正洋 様 桑原隆人 様 桑山章司 様 郡司由美子 様 慶田一郎 様 小池隆男 様 小泉 璋 様 高着敦史 様 小久保嘉郎 様 小谷英生 様 兒玉浩生 様 後藤邦春 様 小林一貴 様 小林繁夫 様 小林博一 様 小林広実 様 小林正明 様 小林真人 様 小宮山賢司 様 是永樹宏 様 近藤康雄 様 最所崇文 様 齋藤浩一 様 齋藤俊一 様 齋藤純也 様 齋藤隆文 様 齋藤英秋 様

#### 銘板色

【ブロンズ】  
個人: 30万円以上  
法人: 100万円以上  
【シルバー】  
個人: 100万円以上  
法人: 500万円以上  
【ゴールド】  
個人: 1,000万円以上  
法人: 5,000万円以上  
【プラチナ】  
個人: 3,000万円以上  
法人: 1億円以上  
(金額は累計)

卒業生のご家族・一般の方

卒業生のご家族・一般の方

3名 (101,000円)

岡崎健一 様  
細谷不二子 様  
他1名

在学生・在学生の保護者

27名 (1,530,000円)

小野邦弘 様 長谷川純一 様  
木村年孝 様 長谷川富一 様  
黒岩祐治 様 番場利州 様  
小安茂男 様 武藤健上 様  
庄山俊彦 様 室木徹亮 様  
白石 元 様 用木正典 様  
鈴木 清 様 八木 晃 様  
千賀俊光 様 山田重久 様  
高島和男 様 山根敏彦 様  
宝木雄一 様 横田富男 様  
樽床伸二 様 他5名  
戸倉 隆 様

企業・法人等

11団体 (23,310,000円)

アサヒビール株式会社 様  
エクソンモービル有限公司 様  
斎久工業株式会社 様  
株式会社サニークレスト 様  
株式会社シネパザール 様  
多摩信用金庫 様  
一橋大学消費生活協同組合 様  
明産株式会社 様  
明治産業株式会社 様  
森ビル株式会社 様  
他1団体

本学役職員

17名 (14,597,900円)

坂口和生 様	関口正彦 様	西林宏之 様	榊田明敏 様	山本貞治 様
坂倉忠夫 様	攝待 卓 様	日戸俊博 様	町田晶生 様	山本時夫 様
坂倉正宣 様	瀬戸聰之 様	二村英之 様	松井千鶴子 様	山本尚禎 様
櫻井宏二郎 様	高田誠一 様	沼口元彦 様	松岡 健 様	結城一禎 様
桜井茂雄 様	高梨 敏 様	野澤一男 様	松下 功 様	楊 超雄 様
櫻井 亨 様	高場洋彰 様	野田聖子 様	松田健志 様	横澤祐介 様
佐々木一郎 様	高橋 通 様	野村 徹 様	松沼敏治 様	横山昇一 様
佐々木 武 様	高橋俊行 様	野村好夫 様	松村順二 様	吉岡 稔 様
定形 哲 様	高橋文夫 様	萩本昌史 様	松本 卓 様	吉川昌夫 様
佐藤征男 様	高原修司 様	萩原旭児 様	松本寛人 様	吉田幸夫 様
佐藤一郎 様	高宮創平 様	橋本孝久 様	丸岡則之 様	吉橋俊郎 様
佐藤栄二 様	瀧本峰男 様	橋本宏明 様	万代 峻 様	吉本清志 様
佐藤公英 様	武内邦信 様	花田一憲 様	三上幸彦 様	寄藤幸治 様
佐藤孝直 様	武田晴雄 様	馬場 昭 様	味水佑毅 様	和田峻明 様
佐藤達弥 様	竹中 良 様	馬場佳一郎 様	水野隆喜 様	渡辺淳平 様
佐藤哲也 様	竹村恭子 様	浜田利宏 様	水野直司 様	渡部孝道 様
佐藤義明 様	田中正昭 様	浜田 愷 様	溝内良輔 様	渡辺哲也 様
塩野 学 様	田中正勝 様	浜林正夫 様	溝越 修 様	渡邊朋弘 様
塩畑秀夫 様	田辺 明 様	林 健太郎 様	湊 秀郎 様	名なし会 様
篠崎俊一 様	田邊昌良 様	原 直嗣 様	南出行生 様	昭和37年悠々会 様
篠田隆之 様	谷合 章 様	原 光雄 様	三宅真治 様	昭和48年会 様
柴本泰宏 様	谷口善秀 様	原田彰三 様	宮崎純一 様	利陽会(飯野利夫ゼミ) 様
澁谷榮介 様	玉川越三 様	半澤健市 様	宮下 晁 様	竹内弘高ゼミ有志一同 様
島田 明 様	千島雅和 様	東 哲也 様	宮島剛直 様	如水会多摩北支部 様
島村洋介 様	津田 剛 様	樋口久雄 様	宮島 湊 様	如水会シアトル支部 様
清水隆明 様	恒吉一宣 様	久田 修 様	向井 徹 様	有限責任監査法人トーマツ 様
志村 博 様	角田真一 様	日野桂文 様	向 正 様	静岡事務所卒業生一同 様
下司英靖 様	鶴岡 坦 様	平尾光司 様	宗像広幸 様	他93名
下見宇一郎 様	鶴田雅男 様	平賀茂孝 様	武良敬治 様	
寿福未来 様	鶴巻 暁 様	深谷光浩 様	武良研二 様	
荘 雅行 様	手島康子 様	福島明男 様	村田治子 様	
荘司榮三 様	寺内秀夫 様	福島茂男 様	村松道男 様	
正田健一 様	寺島 孝 様	福田達夫 様	望戸一男 様	
白井敏昭 様	富樫研輔 様	福田 寛 様	本岡靖隆 様	
白井宏和 様	戸倉敏雄 様	福永 薫 様	森 一將 様	
白井 博 様	戸田一志 様	福屋貴司 様	森 琢実 様	
白井良明 様	轟 美孝 様	福山 昭 様	杜 秀男 様	
白戸哲也 様	仲川 聡 様	藤井典彦 様	森本敏郎 様	
新庄 憲 様	永澤意久雄 様	藤澤忠雄 様	八木政幸 様	
末延幸辰 様	中島崇宏 様	藤村敦士 様	安井敏之 様	
杉浦重明 様	中島 理 様	藤原源司 様	山川 仁 様	
杉浦輝一 様	仲野恒恭 様	藤原尊信 様	山口武彦 様	
杉山徳雄 様	中野俊彦 様	瀧岡 彰 様	山口利夫 様	
鈴鹿直之 様	長野良昭 様	古市正興 様	山口仁史 様	
鈴川嗣人 様	長橋勝治 様	古田貴信 様	山口泰雄 様	
鈴木顕一 様	長峯明德 様	古谷九八郎 様	山下 巧 様	
鈴木伸一 様	中森 徹 様	星崎功明 様	山田 眺 様	
鈴木崇平 様	中山徳三郎 様	星野隆作 様	山田成人 様	
鈴木徹也 様	中山晴之 様	本多幸吉 様	山田高章 様	
角 耕太郎 様	永山在紀 様	本田知子 様	山中 洋 様	
陶山貞夫 様	七尾克久 様	本田陽平 様	山本邦明 様	
瀬川正晴 様	西川敏明 様	前田 啓 様	山本壯兵 様	

## 平成21年度 一橋大学附属図書館 企画展示および講演会のお知らせ

附属図書館は平成13年に公開展示室を開設し、常設展示のほか年1回の企画展示を開催しています。申西事件から100年、また新制大学として一橋大学が発足して60年にあたる本年度は、「一橋大学の歩み キーワードで知る学園史」と題した展示を行います。

一橋大学のはじまりは明治8(1875)年、森有禮が銀座尾張町2丁目に設立した「商法講習所」に求められます。前身を含めた各大学の歴史は様々に異なるものの、国公立大学は昭和24(1949)年に新制大学として発足した点で共通しています。今年はその60周年にあたり、各地で記念事業や式典が開催されています。

こうした契機も考慮し、本年度の附属図書館企画展示は「学園史」をテーマに選びました。『一橋大学百二十年史』(1995年)の出版から10年あまりが経過し、昨年度より本学で開講された「一橋大学の歴史」は新しい事実や見地を提示しています。本展示では図書館の所蔵する資料を使い、10あまりのキーワードに沿って学園史をつづります。また、ゼミナール・部活動・就職などの側面を取り上げて学生生活に接近し、過去の一橋生を身近に感じていただく趣向も盛り込んでいます。



十大学對抗競漕再度優勝記念絵葉書(手前)  
東京市が一橋会に贈った銀杯(奥)



貴重書の疎開に使用された木箱

### 「一橋大学の歩み キーワードで知る学園史」

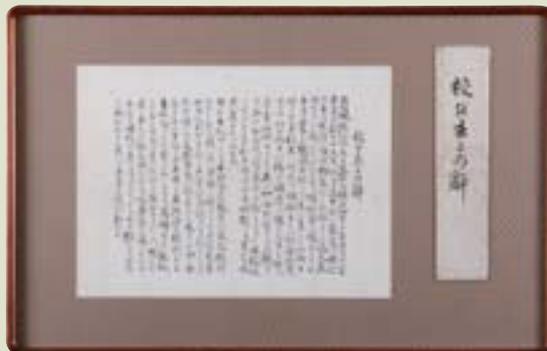
**【展示】** 期間：平成21年10月30日(金)～11月13日(金)  
※11月3日(火・祝)および  
11月7日(土)・11月8日(日)は閉室  
入場：9時30分～16時30分(閉室17時)  
場所：一橋大学附属図書館公開展示室  
(西キャンパス 時計台棟1階)  
入場無料

**【講演】** 講師：田崎宣義教授(社会学研究科)  
演題：「国立大学町の開発と東京商科大学」  
日時：11月5日(木) 14時30分～16時  
場所：一橋大学西キャンパス 第一講義棟405教室  
入場無料・事前申込不要

なお、内容、日時等に変更が生じる場合がありますが、  
その他詳細と併せ、  
附属図書館のウェブサイト(<http://www.lib.hit-u.ac.jp>)にて  
随時ご案内申し上げます。  
【お問い合わせ先】 学術情報課 学術・企画担当  
TEL：042-580-8252  
FAX：042-580-8232



籠城の声明書(籠城事件)



校を去るの辞(申西事件)

## 法科大学院が、平成21年司法試験合格率で 2年連続3回目の全国トップになりました

法科大学院修了者を対象とした平成21年司法試験（新司法試験）の合格者が9月10日、法務省から発表されました。本学法科大学院からは、132名が試験に挑み、うち83名が合格しました。合格率は、62.9%で、昨年につき全国の法科大学院の中でトップの成績を収めました。なお、今回の試験全体の合格者数は2,043人、合格率は27.6%でした。

### ●平成21年司法試験（新司法試験）結果 合格率順（合格者／受験者）

法科大学院名	受験者数（人）			合格者数（人）			合格率		
	合計	既修	未修	合計	既修	未修	合計	既修	未修
1 一橋大学法科大学院	132	91	41	83	60	23	62.9%	65.9%	56.1%
2 東京大学法科大学院	389	272	117	216	168	48	55.5%	61.8%	41.0%
3 京都大学法科大学院	288	205	83	145	120	25	50.3%	58.5%	30.1%
4 神戸大学法科大学院	149	109	40	73	59	14	49.0%	54.1%	35.0%
5 愛知大学法科大学院	41	21	20	20	12	8	48.8%	57.1%	40.0%
6 慶應義塾大学法科大学院	317	218	99	147	118	29	46.4%	54.1%	29.3%
7 中央大学法科大学院	373	250	123	162	136	26	43.4%	54.4%	21.1%
8 北海道大学法科大学院	156	90	66	63	45	18	40.4%	50.0%	27.3%
9 首都大学東京法科大学院	87	62	25	34	28	6	39.1%	45.2%	24.0%
10 千葉大学法科大学院	64	54	10	24	21	3	37.5%	38.9%	30.0%



### 一橋大学広報誌「HQ」

〈編集・発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長（総務、財務、社会連携担当） 山内 進

〈編集長〉

言語社会研究科教授 坂井洋史

〈編集部員〉

商学研究科准教授 松井 剛

経済学研究科准教授 笹倉一広

法学研究科准教授 屋敷二郎

社会学研究科教授 阪西紀子

国際企業戦略研究科准教授 大上慎吾

経済研究所教授 青木玲子

〈外部編集部員〉

有限会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉

光村印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学学長室広報担当

〒186-8601 東京都国立市中2-1

Tel : 042-580-8032 Fax : 042-580-8016

<http://www.hit-u.ac.jp/>

[koho@ad.hit-u.ac.jp](mailto:koho@ad.hit-u.ac.jp)

※ご意見をお寄せください。

一橋大学学長室広報担当 [koho@ad.hit-u.ac.jp](mailto:koho@ad.hit-u.ac.jp)

※本誌掲載の文章・記事・写真等の

無断転載はお断りします。

●広告掲載お問い合わせ先  
一橋大学学長室広報担当  
TEL : 042-580-8032

### 編 集 部 か ら

サッカー・ワールドカップつながりで思い出すこと。2002年日韓共催の時、私のところを主ゼミとする院生が、副ゼミのほうの時間に無断欠席した。前夜、日本代表の予選リーグ突破に喜びきわまった彼（元サッカー少年）は、その感動を共有すべく、新宿の街に繰り出したらしい。後日、副ゼミの教員に事情を尋ねられた彼は、平謝りしつつも、あろうことかあるまいことか、次のような弁明（？）を付け加えた。「でも、主ゼミの先生（私のことである）は、日本代表の試合に合わせて、ゼミの日を替えてくれました」。それをそこで言うんじゃない（事実ではあるが）、副ゼミの教員に対して私が二重に顔向けできないだろーが！ その彼も修士修了後、某新聞社の記者となった。きっと上司、同僚をハラハラさせていることだろうが、勤め続けているようである。ガンバレ！（N.B.）



HITOTSUBASHI  
UNIVERSITY

# 一橋大学 関西アカデミア

《第4回》

講演会

## 世代間格差

— 世代間対立から世代間協調へ

一橋大学は、関西でシンポジウムや講演活動を行う「関西アカデミア」を通じ、134年の歴史を誇る社会科学の総合大学ならではの、諸問題への優れた分析と方策を提唱します。

将来にわたり安心して信頼できる年金制度の構築、雇用機会の世代間分配、格差・貧困問題に対する政策のあり方、デメノ投票方式導入の試み、という4つの切り口から世代間問題にアプローチし、世代間対立から世代間協調に転換するための具体的アイデアを提案します。

少子高齢化が進む中での年金・医療・介護問題。一橋大学世代間問題プロジェクトのプロジェクトが未来への交渉として不透明な時代を切り拓く処方箋を示します。

日時 2009年11月28日(土) 13:30開演(13:00開場)

会場 大阪国際会議場 12階 特別会議室  
〒530-0005 大阪市北区中之島5-3-51 TEL:06-4803-5555

ご参加 無料・先着200名 氏名・所属・連絡先を明記の上、2009年11月16日0時までにE-mailまたはFAXでお申込み下さい。  
【関西アカデミア担当】  
E-mail: academia1128@ad.hit-u.ac.jp FAX: 042-580-8016

プログラム 講演1「世代間問題としての年金」 一橋大学経済研究所教授 高山憲之  
講演2「雇用をめぐる世代間格差」 東京大学社会科学研究所教授 玄田有史  
講演3「貧しい家庭に育った子供の人生」 一橋大学経済研究所教授 小塩隆士  
講演4「次世代の代表」 一橋大学経済研究所教授 青木玲子

主催 一橋大学 企画 一橋大学世代間問題プロジェクト

協賛 大阪ガス株式会社 オムロン株式会社 関西電力株式会社 小林製薬株式会社  
塩野義製薬株式会社 住友生命保険相互会社 住友電気工業株式会社  
パナソニック株式会社 株式会社村田製作所 (順不同)

アクセス



<http://www.gco.co.jp/japanese.html>

◎京阪電中之島線「中之島(大阪国際会議場)駅」(2番出口すぐ)  
◎JR「大阪駅」駅前大阪市営バスターミナルから、大阪市営バス(53系統・船津橋行)、または(55系統・鶴町四行)で約15分「堂島大橋」バス停下車すぐ  
◎シャトルバスが、「リーガロイヤルホテル」(当会議場東隣)とJR「大阪駅」西側(高架下)の間で運行しており、ご利用いただけます。

お問い合わせ先

国立大学法人

一橋大学 国立大学法人一橋大学学長室  
〒186-8601 東京都国立市中2-1 TEL:042-580-8033

<http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2009/0327.html>

※第3回「金融危機に関する公開討論会」(2009年3月7日開催)の様様を大学ホームページでご覧になれます。